
re-very

古時灯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

re - v e r y

【Nコード】

N 0 9 2 1 E

【作者名】

古時灯葉

【あらすじ】

剣術道場で毎日稽古を行っているリエンはある日、師匠から一人の女の子と試合をするように命じられる。だが、彼と彼女に因縁があることを師匠は知らなかった。

第一話：試合前、静けさ

初夏を迎え、陽の光が暑さを感じさせはじめた季節。

町はずれの剣術道場。

うつすらと汗の水滴が額に浮かびはじめ、木目が揃えられた床の上に、年上達の視線を受けながら、年端もいかない子供が二人、向かい合い正座する。

傍らには、稽古を重ねた彼らの手に馴染んだ竹刀。

背筋をぴんと伸ばし、じつと相手を睨む、男の子。烏の濡れ羽のような色の髪が印象的な彼はリエン。

対照的に、その眼差しを受けて、おどおどと目を逸らしている線の細い女の子。一本に纏めた茶色の髪が印象的な彼女はフー。

五歩程度の距離で隔てられているのに、リエンの気迫だけがひしひしと伝わってくる。

ずっと、睨みつけている。

「試合は一本勝負。相手より先に打ち込んだ側の勝ちだ。ただし、直接相手を怪我させるような打ちこみを与えた場合、即刻負けにする。分かったな？」

彼ら二人のちょうど中間に立って、仕切る男は彼らに比べたら年上だ。けれど、まだ若い。腕が彼らの太もも並みに盛り上がる青年。

その身体に似合う豪快な太刀筋が名刺代わりに町じゅうに轟き、一対一では負けたことすらないのではないかと噂までされる、巨木のような体つきの師匠、ゼンが体格に負けない声量を響かせた。

両者ともうなずく。お互いを見据える二人の間に、静けさが漂う。彼らが作る空気が徐々に広がり、取り囲む他の練習生も、固唾を飲み、試合の行方を見守る。誰かが咳をしただけでも、目立ってしまいうそだ。

「お互い、頑張って」

そんな様子も気にせず、壁に寄り掛かり、涼しげに腕を組んで見物する男。

ゼンと反対の柳の葉のような体つき。けれど、そんな優男の外見とは裏腹に百人切りの異名を持つ師匠、ローシェが静かに言った。

師匠とは言っても、二人はまだ、成人して幾年も経っていない。

「両者とも、見合え！」

地の底から響き渡るような大声で指示を出す、ゼン。

両者とも、静かに立ちあがり、竹刀を正面に構える。

リエンは、剣先にまで闘気を漲らせて、威圧する。

フーは、静かに剣を構えた。試合前のおどした態度をがらりと変える。

リエンが睨みつけても、フーは怯える気配すら見せない。

普段はすぐく控え目、悪く言えば引つ込み思案な女の子。それが、竹刀を持つだけで雰囲気さがりと変える。凜とした雰囲気ながら、繰り出す太刀筋は予想もつかないほどに、多い。

そんなこと、他の練習生は知らない。

たぶん、知っているのは彼女の師匠であるローシェと、リエンの二人。

でも、フーが強いことを最初に知ったのも、実感したのも。また彼女が初めて師匠以外と稽古した相手も、そして、伸びていく彼女の実力を十二分に知るのも。

すべて、リエンだった。

師匠たちは、彼らの関係を気付いていただろうか？

いや、もしかしたら仲が良かった事すらも知らないのかもしれないのだ。彼らはそういうことに疎い。

けれど、実際にフーにも、リエンにも実力があるのは、彼らはよく知っている。

そういう事だけは、ちゃっかりと把握しているのが彼らだった。

そして、リエンは内心、彼の師匠であるゼンに不満を漏らしていた。

どうして、フーと今になって皆が見ている前で試合しなきゃならないんだ？ と。

正直、気が進まなかった。

彼女の稽古を目の当たりにしたからこそ、敵わないかもしれない。いや、実際に相手にならないと、そう直に感じてしまっていたから。それほどにまで、フーは強くなってしまったから。

けれどそれも昔の事。ひとつ前の季節のこと。

リエンは今まで、いや、それ以上に誰もが認める程、そして、見ていられなくて無理にでも止めてしまうほどに、血反吐を吐くような稽古を行ってきた。

すべてはフーに勝つように。

再び、彼女を超えるために。

でも、彼女より強くなることができたかどうか、まだ、彼にはわからない。

努力の結果が全部さらけ出されてしまうのが怖いのもまた、彼にとって事実だ。

しかし、本当に気が進まない理由は別にある。

この日を迎えるまでに、リエンは苦々しい気持ちをフーに対して抱きつづけていた。

彼女とは絶交中だった。そうなった出来事以来、一言も話していないし、目も合わせた事がないのだった。

彼が彼女にしたことも。

彼女が彼にしたことも。

お互いに忘れることはなかった。

彼が、それ程にまで彼女を目の敵にする理由を語るには、少し昔の話をしなければならぬ。

彼等、二人の出会いが季節が変わる前。桜がつばみをつける頃。

彼らはお互いに師匠が違っていた。

接点なんて何もなかったのに、それでも出会ってしまった。

話は変わる。ゼンとローシェ。二人の戦い方は、互いの弱点を突くかのように、まったく違う。

が、彼らは共に弟子と対面で稽古することを好んでいた。

町中でも名をはせる彼らの稽古が甘いはずもないのは一目で明らかだった。

そんな、ひと時。稽古中の出来事だった。

第二話：―過去回想―稽古、出会い

向き合っている。ただそれだけなのに。

リエンは、師匠の存在感をひしひしと感じていた。まるで、獲物を見つけた獰猛な動物のように、リエンだけに狙いを定めているのは、一対一で稽古しているからだ。一歩でも、動かれたら彼に勝ち目がないのは、明らかだった。

ゼンに先に仕掛けられて、それを受け流すだけの力はリエンにはない。いや、この道場内でもローシェくらいしかないのだから。

だから、やれることも限られてくる。

先手を、とるしかない。

つま先分だけ、音も立てずに移動する。気づいているはずなのに、ゼンは、リエンが持つ竹刀よりも一回り以上も太いそれを、まったく動かさない。

少しずつ、けれど確実に距離を詰め続ける、石橋を叩くような慎重さを見せる弟子に、師匠は笑いかける。

にやり。ナメクジが這うような速度で近づく彼をからかうような、そんな笑み。

「そんなもので勝てると思ったら大間違いだな。男なら一直線にかかってこい」

道場中に響く低音に、皆が二人に注目する。

足を止めてしまったリエンの耳たぶが赤くなる。

わざわざでかい声で言わなくてもいいじゃないか。師匠。

「まさか」

一音ずつ区切るように、はっきりと彼はそう言った。

「打たれるのがそんなに怖いのか？」

あからさまな挑発に乗ってしまうのが、リエンの悪いところだ。

竹刀をさらに、強く握りしめる。天を突いていた先端を徐々に、師匠に向けていく。

坂道を転げるかのように、身体を前に屈めていく。足裏で、全ての体重を抱え込んで、床を蹴る。一直線、リエンは師匠に突進していく。

でも、そんなけなげな彼の攻撃をゼンは一歩横に動いただけかわしてしまふ。実際、彼のような突きは実戦で何度でも見慣れている。それに、頭に血が上ったままの状態で攻め込んでいるリエンが相手なら、そんなに脅威に感じる必要はない。

感情に身をゆだねてしまふ剣士など、まだ強いとは言えない。

あつという間に背をさらしたリエンにゼンはやっと竹刀を振り上げる。

振り下ろした竹刀がまともにリエンの肩に直撃した。

無論、本気ではなかった。だが、それでも振りは鋭く、場所も的確だった。

「いつ。いつてえー！」

反動のままに竹刀を放り出し、左手で右肩を押さえた。肩甲骨が悲鳴を上げる。歯ぎしりするような、そんなきしむ痛みに耐え兼ねて、道場の床を何度も無様に転げ回った。

「まだまだ甘いな。肩がから空きだ」

豪快に笑うゼン。竹刀をまるで棒切れのように肩に担いでいる。軽く当てたつもりだったが、失敗したようだ。ローシェと比べると、そこら辺はまだ甘いと、感じている。よくよく考えてみたら、丁度急所に近いところに竹刀で打ち込んでしまったのかもしれない。

でも、そうやって痛みを経験しながら成長するのも事実だ。それに、弟子はこんなことではまだ音を上げない。

こんな所で弱音を吐くような奴ならば、何度も立ち向かわない。

「早く立ち上がれ。稽古中だぞ」

笑いを含みながら、まだ寝転がっているリエンをけしかける。

普通、弟子の心配をするはずなのに。

リエンは痛みにも悶えつつも、師匠は鬼だと、そう思った。

「この、暴力師匠」

憎まれ口の一つも叩きたくなる。

「一撃浴びせてから言っただな」

喘ぎ喘ぎ抗議したのに軽く受け流される。

それでも、ゼンはリエンに手を差し出す。

弟子は師匠の手をつかむと、一気に立ち上がる。

握られた手が今度は彼の髪をわしゃわしゃとかき混ぜる。

リエンは、そのようにされている時、何故か嬉しくなる。もう一度、師匠を超えてやろうと、決意を再度刻み込む。

もちろん、心の中にとどめる。ゼンも、そんな弟子の心意気をはつきりと感じている。

「少し休憩するか。まだ、時間はあるからな」

「もう少し、やろうよ」

「今度は、息の根がつかないほど打ち込むぞ」

脅しともつかないような文句を言われて、リエンは黙り込んだ。撃ち込まれた肩がずきりと痛む。

「冗談に決まっているだろう。少しは、他の奴を勉強してみる」

ほら、ゼンは首を横へと向けた。

「懲りないやつだ。またやってやる」

リエンも同じく、首を向ける。心配そうなのに、楽しさが混じる口調の時の師匠は、本当に愉快に思っている証拠だ。でも、本当は彼自身が見たかっただけなんじゃ……？ と、少しだけ、師匠を疑っていたけれど。

二人の目線の先には。

「さあ、どこからでもどうぞ」

後ろ手を組んで微笑むローシェがそこにいた。何十人も弟子に、取り囲まれながら。

彼のいつもの稽古の光景。弟子に対し、挑発するように、一人で立ち向かう。

一対一で稽古を行うゼンのやり方と、全く正反対の稽古。一人にじっくりと立ち向かうことはあまりない、ローシェのやり方。

もっとも、ゼンの場合は容赦なく撃ってくるので、上達は早いかもしれないが志願者は少ない。リエンはその中の一人だった。

一方、ローシェは加減をしてくれているらしい。少なくとも、次の日に痛みが残らないくらいに。

それに、彼は一度に何十人もの弟子と稽古することができる。それが、百人切りの由縁。

ローシェがそう言ってから数秒。彼の真後ろにいた少年が、自分を鼓舞するかのように叫びながら、ローシェに近付き、勢いそのままに一番最初に竹刀を振り上げた。

彼につられるように、回りの人間も駆け出す。

円の中心にたたずむ、ローシェに向かって。

「こんなものでは、あいつには勝てないな」

ゼンが呟いた。

なんで。とリエンが聞く間もなく、最初に飛び出した少年がローシェに一撃を振り下ろす。

彼の間近だったのに、なのにかすりもしない。空振りに終わる。

リエンも、誰もが自分の目を疑った。

ローシェが視界から消えたのだ。

皆、ゼン以外が周りを見渡す。

皆が首を元の位置に戻し、不可解な表情を浮かべる。すると、突然、最初に挑んだ少年がうめいた。

彼の両肩にローシェが両足を、器用に乘せていた。

少年がくず折れる合間に、軽やかに飛び降りる。

弟子達が殺到する、中心から逃れた格好のローシェは、まるで無関係だと言わんばかりの位置に着地する。同時に屈伸をするかのように、深々と足を曲げる。と、バネのように勢い良く彼を指していた集団に向かって飛び出した。

自分の師匠を攻撃しようとした彼らは、その成り行きをただ啞然と眺めていることしかできない。

リエンはまるで踊りを見ているように錯覚した。

それほどまで、ローシェの剣捌きは華麗だった。

ローシェの動きが停まると、ほぼ全員がうずくまっていた。全て、峰打ち。けれど、彼らは動けない。

「ほう」

ゼンは感心したように息をつく。まだ一人残っていたのだ。

リエンと同じ年くらいの女の子。なのに、彼女の名前をリエンは知らない。

彼女は、逃げないように足を踏張りながら、竹刀を構えた。

ローシェは一步一步、ペースを変えることなく、静かに近づく。

彼女も一歩たりとも引かず、立ち向かう。

「ローシェに一歩もひかないか………」

ゼンが呟く。

「すっげえ、重圧」

ボケつと眺めていたリエンさえも、ゼンの横に座って背筋を伸ばしている。戦っていないにもかかわらず、だ。

いつも穏やかなローシェが何故か、威圧感を放っていた。

たかが、女の子を相手にしているだけなのに。

竹刀を構えた女の子は、固まってしまったように、動かない。

その間にも、ローシェは着実に近付いた。

だが、事態は意外な展開を見せる。

女の子が先に攻めたのだ。

その動きは、長年稽古している、リエンには及ばないものの。

何故か、リエンは見入ってしまった。

ローシェの脇腹目掛けて、彼女が竹刀を横に風ごうとした所で、竹の弾ける音がした。

女の子の手から離れた竹刀が宙を飛ぶ。

「あっ」

しまった、女の子が地面に落ちる竹刀を目で追いながら、漏らした。

「おしまい」

ローシエは剣先を彼女の胸元に向ける。

息の詰まるような静けさが消える。二人だけがたっているだけだ。

「やっぱり、ローシエは強いな。俺にはかなわんが」

ゼンが笑う。あんな、緊迫感の後なのに、平然と。

リエンは息を飲み込んだ。水を飲みたかった。緊張感がまだ消えない。いつの間にか握っている、その手に汗が、じわりとにじむ。

「負けました」

女の子がうつむきがちに呟いた。

「頑張ったね。でもどうして、最後に戦おうと思ったのかな？」

ローシエは、近づきながらにこにこ彼女を見下ろし、尋ねた。

女の子は、言葉を探すように黙りこむ。

「皆、私よりも背が高くて、動けないなって。それなら、後から行こうって思いました」

途切れ途切れになりながら、女の子は答えた。

腕組みしながら聞いていたローシェはその答えを聞くと、彼女の頭をさりとなでる。

「えらい、そこまで考えたんだね」

唐突だったにもかかわらず、自然な誉めかただった。女の子は突然の出来事に困ったように笑う。まさか、誉められるとは思っていなかったのだろう。

「師匠。質問」

その光景を眺めていたリエンが尋ねる。

「なんだ」

「あの女の子誰？」

「惚れたのか？」

「違うって」

間髪いれずに否定する。師匠の突拍子もない返事に慌ててしまった。

「あそこまで考えてるなら、強いんじゃないかなって。ロー師匠本

「気みたいだったし」

真面目に説明しようとしたのに調子が狂う。いつもより早口になってしまった。本当に、誤解されそうだ。これから先にかかわれてしまうかもしれない。

ゼンは黙りこむ。

「師匠！」

「あ、ああ。ローシェはいつも本気だしているな」

明らかに、的外れの答が返ってくる。

「違うよ。俺は、あの女の子は誰かって聞いてるんだ。どこかの間抜け師匠と違って、ロー師匠がいつも本気だったのも分かってるし」

「お前には、関係のないことだ」

ゼンは何故か素っ気ない。弟子がからかっているのにも気付かない。

「第一、新入りなんてたくさんいるだろう。どうして、あの子にこだわる？」

猫のように丸めていた背を伸ばし、また座りなおした。

「それは……」

リエンにも知りえないものだった。だけど、なんとなく、あの女

の子が気になったのだ。好き嫌い関係なく。強いて言うなら、雰囲気？

「とりあえず。今日の稽古は終わりだ」

首を左右に曲げながら、ゼンが立ち上がる。

「もう少しやろうよ。師匠」

そう言っ、て、師匠に続いて立ち上がるリエンの肩に激痛が轟いた。忘れていた。見物する前に、打ちこまれていたことを。それも、数日は退かないゼンの一撃だ。

膝をつく。痛みに耐えるように、歯を食いしばった。いつものように、立ち上がることができない。

動けずにその場で固まっていたリエンは、突然持ち上げられた。

うわっ、と驚きの声。

ゼンがリエンの身体を持ち上げ、背中におぶったのだった。

「その痛み、しばらくはひかないぞ」

背中越しに聞こえる、ゼンの声は暖かい。

「し、師匠！ 恥ずかしいって。俺、歩けるよ！」

「まともに歩けないだろう。少しは甘えてみる、リエン。恥ずかしくなんかないだろうが。自慢になるぞ？ なんせ、俺におぶっても

らうんだからな」

「だからって……」

「強く打ちすぎた、俺の責任だからな。後でイエに診てもらっておけ。稽古はまた明日からだ。——落ちそうだぞ」

「……わかったよ」

そう言って、リエンは渋々と師匠に抱きついた。

「二人は、仲がいいね」

二人のやり取りを眺めていた、ローシェがのんびりと言った。

「僕らもやってみようか？」

唐突に声をかけられた女の子は戸惑ったように首を横に振った。

「え……んりよし、ます」

途切れがちな声は、照れたように聞こえた。

リエンにとって、女の子の前でおぶられているのは顔から火がでるほど恥ずかしかった。それに、同じようにローシェが聞いたのにも関わらず、女の子は断った所を見て、自分の情けなさを痛感していた。

そんなこんなだ。

けれど、それが、彼と彼女の最初の出会いだった。

第三話：―過去回想―翌朝、再会

よし。とりエンは、声を上げずに、こっそりと小さく拳を作った。今日は、上手く起きる事が出来た。

まだ、起き上がっても虚ろで、寝ぼけている身体を動かして目覚めさせる。

ついでに、肩を恐る恐る触る。昨日、師匠に撃たれた場所だ。

やはり、まだ響くように痛い。けれど腕が上がる分だけ、昨日よりはましだった。イエさんも大丈夫だって言っていたから、今日も竹刀を振ってもけがはしないだろう。

周りはまだ寝静まる、明け方。まだ日が上っていないようだった。薄暗さが薄い膜を作るように辺りを支配する。

寝ている仲間を起こさないように、物音をたてず、慎重に、爪先立ちで部屋を後にした。

彼が朝早く、それも夜が明ける前に起きたのには理由があった。

部屋を出て、寝間着から普段着に着替える。その足で、向かった先は。

稽古場。

夜遅くまで、稽古出来る体力は、まだ幼い彼にはない。それに、稽古を終えた時には、もうくたくただ。一刻も早く寝たかった。

でも、早く師匠に追いつきたかった。

だから、こうやって朝早くに起きて、朝稽古を行うのが彼の日課になっていた。

とは、いつでもいつもではない。寝過ごした事もあるし、面倒臭いな。と、休む事もあった。彼しか知らないから、別にとがめられる訳ではないけれど。

稽古場に入ると、空気を切り裂くような鋭い音が耳に入る。

あれ？ リエンは不思議に思った。誰かがいる。

朝に稽古をする人間を彼はあまり見たことがなかった。いつも、誰もいないはずなのに。

誰だろう？ 中をのぞく。師匠のどちらかだろうか？

そう思った彼は意外な人物を目の当たりにした。

場内に響いていたのは素振りの音と呼吸音。何時から、行っているのだろうか？ 小気味いい音が馴染むように聞こえる。

昨日、ローシェの稽古に最後まで残った女の子。

一心不乱に、だけど一定の速さで素振りをする姿は、凜としていた。とても様になっている。

リエンは、言葉を失った。まじまじと見とれてしまう。

彼が眺めてから、数分。何本目かを真上に振り上げた瞬間、竹刀が止まった。そのまま、するすると手を降ろし、女の子は視線を気にするかのようにおどおどと振り向き、入口に立ったままのリエンを見つける。

その仕草は、素振りとは対照的だった。

女の子の視線が、リエンにぶつかる。

「おはよう」

とりあえず浮かんで来た言葉がそれ。リエンは、挨拶をする。

それだけなのに、なぜか気恥ずかしかった。

「えっと……。おはよう」

ぴよこりと頭を下げる女の子の声は、辛うじて聞き取れるくらいのか細い声。言うやいなや、顔をそむけた。

間の悪い沈黙が、その場を支配する。

リエンは女の子に二、三步近づいた。

「昨日、ロー師匠の稽古に最後まで残ったよな、お前」

リエンは、ぎこちなく話し掛ける。初対面でさらに女の子、話し辛いなんて言うまでもない。

「そうだけど……」

女の子の声はやはり小さい。それでいて、震えている。

まだ、リエンには聞こえづらかった。聞き取れるようにと、さらに、近づく。

「名前、何て言うの？」

女の子は、溜め息をついた。

「だから、何なんだよ」

何度でも、彼女は溜め息を繰り返す。

「名前くらい教えたっていいだろ」

半ば、いらつきながらもリエンは繰り返したずねる。でも、名前を教えたくないなら、はっきりとそう言えばいいじゃないか。別に、そうでもどうでもいいし、それでも自然と名前が知れるわけだし。

それでも、女の子の声を聞こうと、リエンは、彼女の目の前まで近づいた。

そこで、女の子が吐く息が同じ音だって感じた。

彼女は溜め息をついていないかもしれないのかも。

まさか？

「もしかして、フーって、名前なのか？」

詰め寄られるような形で近づかれていた女の子は困ったように、俯いていた首を微かにだけ動かした。

頷いた！

「うわっ！ ごめん！ 名前じゃないと思ったんだ！ 本当に悪い！」

突然に大声を出した彼にびくりと、女の子の身体が震える。

そんなのお構いなしに、リエンは、穴があったら入りたい。ということわざを正に地で体験していた。まさか、フーって言うのが名前だなんて。知らぬ間に、体温が熱くなってしまうそうになる。

リエンにとって、昨日師匠におぶわれた以上に恥ずかしかった。もしかしたら、まだ短い彼の全人生の中で一番恥ずかしい出来事かもしれない。

まさか、人の名前を聞き間違えるなんて。自分だったら、間違いなく思い出に残ってしまう。

突然怒った口調から、訳の分からない行動にでた彼に女の子は驚き、眺めていた。

それも、少しだけで。

竹刀を持っていない手を口元へ持って行って。

微かに笑った。

「面白いね」

木の葉がざわめいたようなささやき。

その声を聞いたリエンは、そっと彼女を見つめる。

「へ？」

「そう。私はフーっていうの。よろしくね、リエン君」

固まってしまったままの彼にフーはいぶかしむ。

「どうしたの？」

「どうして、俺の名前知ってるの？」

「昨日、ローシェ師匠に教えてもらったの。あのおぶわれている人は誰って？」

フーにとって、それはフォローだったのだろう。しかし、それはリエンにとって思い出さたくないものだった。まして、それで女の子に名前を知られてしまったなんて。

微妙としか言いようがない。

「あの、気にしないでいいよ。ゼン師匠も同じような感じで、私の名前、聞き間違えていたから」

彼女のその一言が、リエンの傷口に辛子を塗るように染み込んだ。まさか、師匠と同じ間違いをするなんて。そういえば、仲間からゼン師匠に似てきたな、なんて言われたこともあったし。その時は冗談で済ましていたけれど。誰の目からでもいつの間にか、師匠に似てきているように見えるなんて、あまり認めたくなかった。

ますます、落ち込む彼。

「ごめんなさい」

彼女に申し訳なくさせている、自身がとても情けない。リエンがそう思ったのは言うまでもなかった。

第四話：―過去回想―違和感、約束

「まだ、ここにきて数日も経ってないのか？」

「うん」

取り乱していたリエンがやっと落ち着いた。彼は、フーとともに壁際に寄って座っていた。

まだ、彼女は正座したままの姿勢を崩さない。師匠と話してるんじゃないんだから、もう少し楽にしていればいいのに、とリエンは思う。

話をはじめて間もなく。彼女が竹刀を握ったばかりの初心者だという事を知った。

「それにしても、素振りきちんとなってたよ。直すところもなかったし」

「本当？」

「ああ。俺だって、始めた時はすぐ直されたから。『どうして真っ直ぐ振れないんだ。振れるまでそれ以外の稽古はさせない』って、ひと月もそれだった」

「ありがとう」

「別に。俺は見ただけを言っただけだから。そんな、感謝しなくていいよ」

「でも、あまり褒められた事ないから。嬉しくて」

そう言われると困る。普段の彼はあまりそういうことを言わないのだ。ただ、何を話せばいいか分からないから、ひたすらに思ったことを言い募っているだけなのだ。いつ、フーが不機嫌になっつまうかは知れないけど、黙りこんでいるよりはましだった。

でも、嬉しがってくれと、また、彼も同じ気持ちになってくる。

「昨日の稽古もロー師匠、お前だけに本気だったし。珍しいんだぜ。師匠、滅多にあんな雰囲気出さないから……。ってか、あんな師匠初めて見た」

段々と、彼の口がまわりはじめる。

「それは、たまたまじゃないかな。ローシェ師匠も初心者には負けたくないだろうし」

フーは正座した足を少しだけ崩した。安心したのだろうか、彼女の声は少しだけはつきりと聞こえるようになった。それでも、まだリエンの耳ではあいまいだけだ。

「お前、本当に経験ないんだよな」

フーに対して、身を乗り出すような体勢になってリエンは後悔した。のけ反るような、そんな姿勢のまま彼女は怯えたように身を縮めてしまった。

聞くまでもなく、彼女の態度で彼は答えを知る。

それでも、リエンは違和感を持った。昨日の彼女の姿はあまりに堂々としていたから。大体、初めて稽古を受ける人間はリエンも含めて、どこか脅えたような感じを持っているはずだから。丁度、今のフーのように。本当は、昨日見せるべきだったのに。初心者ではないと踏んでいた分、本当に意外だった。

そんな考えを傍目に追いながら、「悪かった」さっきの無礼を詫びようと、彼女の顔に眼をやると、彼は違和感に気がついた。

「目の色が違う」

茶色が強くなっている、彼女の瞳の色。リエンや、この町産まれの人間の瞳の色は総じて黒色に近い色のはずなのに。

フーは、目をつむると、視線を伏せた。あまり触れられたくない話題だっというのは、一目見てわかる。

また、失敗してしまった。

この道場に住んでいる皆、訳ありの事情を持っている。親がいなかったり、孤児だったり。ならず者みたいな格好の大人が昼間から普通に酒臭い息を吐いているほどに、町の治安が悪いから。だから、何があっても自分の事は自分で守れる実力が持てるように、ここに住みこみ稽古するものが多い。

だからといって、親密になろうとなかろうと、お互いのことはむやみやたらに知ろうとしてはいけなかった。リエンもそのうちの一人なのに。

それでも、彼が口にだしてしまうほど、彼女の瞳は珍しかった。

「悪い。変なこと聞いたな」

「髪の毛もちよつとだけ、茶色いでしょ」

リエンが謝つてすぐ、フーは肩にかかる長さの髪を触った。確かに、毛先から、頭に近づくにつれて、茶色が濃くなってくる。

「私、海をこえてやってきたの。何処から来たのかも分からないけど、物心ついたときからずっと船の中で揺られて……それで……」

「ストップ。これ以上言うな」

早口になっていくフーの言葉を彼は、彼女の口元へ伸ばした手の平で遮った。

「リエン君？」

消え入りそうな、震えてしまうような音で、名を呼ぶ彼女は、リエンの思いの外真剣な顔付きに音を失った。

「リエンでいいよ。下手に君付けされると、調子狂う」

「ごめん」

「ごめんもいらない。ここにいる奴らつて皆、人に言えないようなことたくさんあるんだ。それを無理矢理吐き出させたくない」

「無理になんて、やってないよ」

「じゃあ、なんで早口になるんだ」

「それは」

「自分が涙目になってるの。気付かないだろ」

リエンは彼女の目元を拭って、人差し指を間近で見せる。確かに水滴が付いていた。

「本当だ」

「俺も人の事、言えないけどさ。初めて、竹刀持った時、稽古してくれたのは師匠じゃないし。すごくいんけんな奴だったから、ひと月も竹刀振らされて、手がまめだらけになったし、それで……」

努めて明るい声を発するリエンにフーが話をさえぎる。

「リエン君」

「だから、リエンでいいよ」

「あの……友達になってくれる？」

リエンは、フーの事を見つめなおした。そんなこと、聞かなくてわかるはずなのに、どうしてだろう、と。

「私、ここに入っただけで、前も友達って呼べる人いなかったから」

言葉を探しあぐねるように、だけど選んだそれを早口にフーは言った。身体を少し、左右に動かしながら、さつきとは違う、早口。自分の言葉で彼女の顔がほんのりと紅くなる。

「当たり前だろ。なんで友達になっちゃいけない理由があるんだよ」

フーが精一杯に放った言葉をリエンは呆気なく答えた。が、それを聞いて、彼女が顔をほんの少しだけ、綻ばしたのには気付かなかった。こんな簡単にいいよと言ってくれて、彼女はほっとしていたことも。

「あ、ありがとう」

「礼はいらないよ」

どうして、そんなに喜ぶのだろうか？

「そうだ、これから毎日、朝二人で練習しようぜ。友達になった記念に」

突拍子な提案だ。無理かなとリエン自身もそう思っていた。フーもまた、きょとんとした顔で、彼を見つめている。

「ほら、一人で毎朝竹刀振ってるのも大変だと思うし、二人でやってたほうが上達も早いぜ？

お前、見かけによらず強そうだしな」

言い訳にしかないような理由を積み上げていた、その矢先。

「いいよ」と彼女は応えた。

「まだまだ、下手だけど。よろしくね。リエン」

フーはうつすらと笑う。強張ったような顔を綻ばせ、心を許したようなその顔に、リエンはどきりとした。

彼が思っていたよりもずっと、彼女がかわいらしく見えたのだった。

よろしくな、フー。

そう、彼も返してみたけれど、恥ずかしくて小声でしか言えなかった。

第五話：――過去回想――恐れ、決別

そうして数日、リエンは朝早くに起き、道場でフーとともに朝稽古を行った。その間、彼は一度も寝坊することはなかった。

最初の内は、リエンも手加減をして臨んでいた。彼女は初心者だったから。むしろ、教えていた時間のほうが長かった。

それなのに、今では本気を出さなければ、彼女の相手をする事が出来なくなってしまうていた。

フーの上達するスピードは群を抜いていた。

人は、それを才能というのかもしれない。だから、師匠である二人も対応が他と少しだけ違っていたのかもしれないし、初めてリエンがフーを見た時も何かが違うと感じてしまったのかもしれない。いや、まだ師匠達よりかは力が劣るリエンでさえも、勘付いてしまふほど、彼女のそれはずば抜けていた。

段々と、彼女の攻めが彼を捉えていき、正直、かなわなくなっていく。

いつか、フーはリエンを超えてしまふだろう。

でも、リエンはとても恐れていた。

長年積み重ねて来た努力が、それが、始めて数日努力しただけの人にいとあつさりと抜かされてしまうなんて彼には耐えられなかった。

他の誰よりも、それも朝から晩までずっと稽古してきた自信が彼にはあった。実際、ゼンに一番しごかれてきたのは、リエンだった。

そんな、内心焦りを感じていたリエンの様子を、フーは気付けなかった。初心者であつた彼女も精一杯、彼が教えてくれることについていくだけで、実力差が縮まっているなんて思いもしなかったから。

二人の間は少しずつだが溝が深まり、気がつくど、どうしようもないほどに広がっていつて、ぎくしゃくしていつて。

やがて、彼と彼女の関係は、誤って床に落としてしまった皿のようにな、綺麗に壊れることになる。

.....

きっかけは、とても些細な事だった。

「なんだよ、それ」

リエンは不覚にも動揺してしまった。

友達と話していた時のこと。他愛もないような、おしゃべりの中でふと出た話題だった。

「だから噂になってるんだって。お前、新入りの女の子のこと好きなんだろ？」

素手でそう言った友達の頭を叩くリエン。凶星であるわけがないのに、それでも心臓が一瞬止まる。

「あり得るよな。リエン、正直になれよ」

もう一人、彼の友達が勇気づけるように、肩を叩いた。

「なんで、あんな奴を好きになんないといけないんだよ」

リエンは腕を組み、そっぽを向いた。

「やっぱり、そんな奴がいるんだな」

「な、何言ってるんだよ」

「でも、なんであんな静かな女の子とお前が知り合えたんだ？
わ
からん」

「だから、何言ってるんだって」

「それに、いい噂も聞かないし」

「はあ？」

「噂だけだよ」

あまりの剣幕に押されて、その話題を振った少年が黙り込む。

しかし、ゆっくりと

「本人がいない前で、あることないことを口汚く言うんだってさ」

「……なんだよ、それ」

リエンの知る限り、フーは彼らの言うとおり物静かな女の子だ。というか、あまり彼女から話さないし、そもそもしゃべり続ける彼女を想像できなかった。

「あまり関わらないほうがいいぜ。お前も言われてたみたいだし」

「何を？」

「聞かないほうがいいと思うけどな」

親身になって言うのもリエンのためであった。

「いいから話せよ」

二人は顔を見合わせる。

彼らを見つめるリエンのまなざしは真面目だ。

彼が話した噂。

女の子がリエンの事を馬鹿にした。なんであんなに練習しているのに弱いのか。よくあれでゼン師匠に恥ずかしげもなく稽古をお願いできるよね。馬鹿みたい、と。

そんな感じの、聞くに堪えない悪口を放ったと。

何処から広まったのか、分からないが、とにかくそういう事らしい。

自分が彼女にかなわないかもしれないと内心、怯えている中で聞いた悪口。しかも、気にしている事をずばりと言われて、リエンは動揺していた。

「酷いよな」

黙り込むリエンに話し掛ける。

「それに、なんであいつがいつも一人でいるか知ってるか？ あいつが俺達の事、屁にも思っていないからだぜ。そっけないみたいし、俺達もそういうふうに言われてるみたいだし。だいたいあいつ、口――師匠にひいきされすぎだよ」

彼らは、饒舌にフーの悪口を語り続けた。

リエンは、何をどう返事して良いのか分からなかった。ただ、友達が教えてくれる情報を聞いている他なかった。

.....

次の日、いつものように朝稽古をしようと待ち侘びていたフーの前に少し遅れて、リエンが着いた。

彼にとってそれは珍しい事だった。普段は早めに準備をして、彼

女を待っているというのに。

いつものように、彼女は挨拶を交わそうと思ったが、口をつぐんだ。いつもとリエンの様子が違って見えた。

「お前、俺の悪口言ったんだってな」

挨拶をするまえに、リエンの言葉が静かに吐き出された。

「それに、皆の悪口を言ってるって」

床を見つめていた彼の視線が彼女に移る。

「そんなの嘘だよな。お前がそんな事言っはす無いもんな」

リエンは笑いかけた。とても空疎に。

違うよ、と。彼女のただ一つだけの返答を待ち侘びて、尋ねたのに。

待ち侘びていたのに。

「誰から聞いたの？」

「フィとピン」彼にそれを教えてくれた友達の名前。

その名を聞いて、フーの顔が少しだけ曇った。下を向き、何かを口にする。

それは、彼の耳を澄まさなければ聞こえない程度の声だった。

まるで、最初にした自己紹介みたいに。

けれど。

あの時みたいに、耳を澄まさなければよかった。

「じ…めん なさ、い」

たったこれだけを言うためだけ。なのに長い時間、聞いていたよう気がした。

今、最もリエンが聞きたくないもの。

「認めるのか？」

リエンもフーのことを言えなかった。彼も、これを言うだけなのに口が震えてうまく言えなかったから。

もし、フーが認めたら、怒鳴りつけて絶交しようと、決めていたのに。拍子抜けした。肩から、膝から力が抜ける。けれど、座りこまない。座りこもうとしたら、だめだから。裏切られたと思って、そのまま何もなかったかのようにしなければいけないと思ったから。

今までのフーの態度を見ていて、本当にそんなことはないと思っていた。あんなに、一生懸命に彼についてきたのだから。ずっと、嫌な顔一つもしないで稽古に付き合ってくれたのだから。すぐに、二の句を告げることはできなかった。

「どうして？」

フーは顔を覆ったまま、答えない。

「なんでだよ」

苛立たしげな調子で再度問いかける。やっと、フーが顔を上げた。しかたないじゃないと言うかのように。

その顔がリエンは気に入らなかった。

まるで、俺が悪い。そう言っているみたいだ。

なんで、俺が先に酷い事言われたのに、お前が酷い事言われたみたいになるんだよ。

俺が、被害者なのに。

今まで、そんなことする奴じゃないって思ってたのに。

信じてたのに。

彼女に対する信頼が音をたてて崩れ、そのかわりに憎悪が、一斉に芽生えていった。

「強くなって、いい気になってんじゃないやねえよ」

彼女に対して思っていたことが自然と口を突く。

フーの顔が強張った。

「私、強くなんかない」

どうしてと問われても、開かなかった口がついに開く。

「そう言っても、内心、俺の事馬鹿にしてんだろ？ 無駄な努力ばかりして、お前よりも強くなれない俺に向かってさ」

「どうして……」

そう問い返すフーを彼は無視する。

「お前なんか、大嫌いだ」

うつすらと、ほほ笑むと、一気に彼の顔にしわが寄った。

「もう顔も見たくない。二度と俺の前に姿を見せるな！！」

興奮したまま叫ぶと、怒りに任せて、手に持った竹刀を叩きつけた。割れるような音を背に、呆然とするフーを無視して、リエンは道場を出た。

だけど、そうすることで彼は安堵したのも事実だった。これで、朝に惨めな思いをしなくてすむ、と。一気に成長し続ける彼女を見なくてもすむ、と。

それ以来、彼女と朝に稽古することは無くなった。今の今まで、ずっと話しかけなかったし、向こうもそうしなかった。

第六話：試合、失望、激昂

二人を離す間合いは五歩。

呼吸音が空気の中に溶け込んでいくような、そんな感覚を持ってしまいそうなほど静かだ。

耳の裏側から血の流れる音が聞こえ、竹刀が自分の身体の一部になっっていくかのように、そして、相手以外を視界に捉えることもない、それくらい彼ら二人は集中する。

二人とも、もう準備はできていた。

ゼンが両者を見渡す。構えているかの確認をして、一歩前に踏み出し、右手を振り上げ。

切りつけるように、下へと振り下ろした。

「始め！！」

咆哮とともに。ほぼ同時？ いや、一寸先にリエンが駆けけた。

体中に気合いを込めながら竹刀を振り上げ、彼女に仕掛ける。

先手必勝。リエンが考えた作戦だった。勝つためには、そうするしか無かった。そもそも、彼は防御が苦手だ。フーは、防御が得意なはずだが。リエンは、攻めればいつか、守りを破るはずだ。と信じて、攻めていく。

彼は踏み込んでいき、竹刀と竹刀を何回もぶつけた。そのたびに火花が飛び散っているように錯覚する。

見たところリエンが攻勢に見える、フーは受け流すだけで精一杯に見えた。

しかし。

隙がない。

リエンは真つ先にそう感じた。どこに打つても、全て受けとめられる。一歩先んじたような感触もなく、永遠に続くように打ち合っってしまうような、そんな感じがした。当然、息をつくひまもない。

どちらかの体力がなくなってしまうまでの勝負になりそうだ。もちろん、フーよりも断然にリエンのほうが体力はあるが、今、打ち続けている彼の消耗は彼女以上だった。このままだと、先に彼は尽きてしまう。

しかし、攻撃を止めてしまうような、隙をリエンは見せることができなかった。

隙を見せてしまったら。

間違いなくやられてしまう。もしくは、すかさず彼女が反撃を仕掛けてきて、彼は劣勢に立たされてしまう。彼女の攻撃を受け流せる自信は彼にはなかった。まだ、師匠の攻撃すらまともにくらってしまう程なのだから。

それならば、攻勢が続いている今、決めるしかない。

リエンはそう確信した。

詰める間合いにさらに、竹刀が入る。それらが交錯してじりと、
膠着する。歯ぎしりをするような音を鳴らす竹刀を間に挟んで、フ
ーと目が合った。

相手を射ぬき、喰らいつくすような、闘志あふれるリエンの眼差
しをフーは、真正面から受け止めずに、そらした。

普通は気力で負けないように睨み返すはず。目を逸らすというこ
とは相手に対して怖じけずく事にも繋がるからだ。

たとえ、睨み返さなくてもそこにはそらしたなんて雰囲気は微塵
たりとも出さない。

けれど、彼女はそうしなかった。竹刀を挟んだくらいの至近距離
でも、彼女は彼の目線に答えなかった。

リエンが自ら後ろに引き、一度だけ、距離を置いた。わざと隙を
見せる。もし、フーが本気で試合をしているなら、こんな好機を逃
すはずはない。踏み込んでくるはずだ。

けれど、彼女は踏み込まなかった。探るように、その場を動か
ない。

予想は見事に当たってしまう。

なんでだよ？ 最後に交わした言葉が脳裏に浮かぶ。同じ問いを、
目線で問いかけた。

彼女は、答えずに真正面に立っているだけ。視線はリエンと合わない。彼の身体はどこかにぼんやりと視点を合わすだけ。しかし、それも体裁を整えるだけのようにはしか、リエンには見えなかった。闘っている眼には、彼には到底見えない。

この試合で彼女が手を抜いていることにリエンは気付いてしまった。

目をそらすこと自体、相手を格下に見て、おちよくっている証拠なのだ。

ここまで、ぞんざいに扱われたことがリエンにはなかった。師匠ですら、手を抜いていると彼自身が言っている、まともにぶつかってくれるのに。まして、今まで彼女に勝つことを目的に稽古を誰よりもしてきた。それなのに、こう扱われる。

彼が努力しても彼女との実力差は埋められなかったのだ。

「うあああつー！」

身体の奥底から大声を発して、リエンはフーに突進した。その勢いのまま、上段から打ち下ろす。

もう、彼にはどうでもよかった。ただ、彼女に一矢報いたかった。

精一杯にリエンが打ち込んだ竹刀は彼女の竹刀を跳ね飛ばす。

彼女は彼と同じだけの力を下から、竹刀に加えようとした。それでも、できない。体格差、もって生まれた腕力が違うのだから。

竹刀を弾き飛ばされた、彼女の手には何もない。

それなのに、もう一歩だけ、リエンは踏み込んだ。精一杯だった力を新たに注いだのは、見境が無くなった感情だった。

踏み込んだ分だけ身体を押された、フーは転ばないように地面を踏んだ。それでも、姿勢が崩れる。遠くに飛んでしまった竹刀を横目で確認して、まるで見えない杖を突くように、構え直す彼女に、隙ができる。いや、もう勝負はついていた。

フーは、いや道場全体がリエンの行動に身体を凍らせた。

彼女がよろけた分だけ、開いた距離をリエンは一拍遅れて踏み込んでいた。その勢いで、竹刀を横になぐ。まるで、竹刀を叩き割るような速さで。

もし、これが外れたらリエンは負ける。それくらい、力を込めた一撃。

でも、彼女は無防備だ。

道場内の音が一瞬、静まる。

それでもフーは、彼が詰め寄った分だけ後ろへ引いた。もう避けることができなかった。彼女ができた一杯はそれだけだった。

三音が一度に響く。

一つ、見守る師匠達のとなり声。

二つ。練習生の悲鳴。

三つ。フーの身体がひしゃげた、そんな音。

第七話：伝わらない理由、そして驚き

ゆっくりと時間が過ぎていくように感じられた。吹き飛んだ彼女は床に叩きつけられ、雑巾をかけるかのように、床に体を引きずられながら、ようやく止まる。その、うずくまった身体がかすかに震え、蚊の鳴くようなうめき声が聞こえた。

ざわめきが波紋のように広がる。その、収束する中心でリエンは、小刻みに震える歯をかみしめながら黙って立ちすくむしかなかった。

覚悟を決める前に、勢いでやってしまった。それでも、罪悪感はなかった。本気でやらなかったフーが悪いんだと、そう自身に言い聞かせる。そんな彼の心にわき起こる、怒りが混ざった興奮は未だ冷めない。

いつのまにか肩で息をしていることに気付く。

両師匠が飛び出していた。

ローシエはフーを介抱するために。

ゼンは、一直線にリエンに近づいていき、黙って彼の腹に拳骨を喰らわせた。誰もが、卒倒するような、腹にまで響くような重い一発だ。

「この馬鹿野郎！ 相手はもう武器を持っていなかったんだぞ！」

叱ることを通り越して、口からつばを散らせて怒鳴り散らすゼンは鬼みたいに顔を真っ赤に染めていた。あまりの剣幕に、ざわめい

ていた道場内が、水が引いていくように静まりかえってしまった。

リエンは腹を殴られても倒れなかった。二本の足を地面に根付かせて、うつむけた顔を上げる。彼よりもずっと背の高い、黙ったままのゼンの顔と正対して。

にらみ合う。

「必死だったんだ」

彼は自分が正しいと確信していた。フーは、手を抜いていたのだから。

けれど、口調は、どうしてもふて腐れたように聞こえてしまう。

ゼンはリエンの目をじっと見据える。あまりに真剣な眼差しにリエンは目を背けなくなった。けれど、そらせない。ゼンの瞳に浮かぶのは、戸惑いの色。弟子が見せた態度が、あまりに違和感があったから。普段なら、間違いはすぐに詫びる奴だったはずなのに？

その一方で、リエンは、自分のしたことを師匠に納得してもらいたかった。

それなのに、師匠は気付いてくれそうもない。どうして！ リエンは心の中で叫ぶ。正々堂々として、卑怯なことをなによりも嫌う、師匠なら理解してくれると思ったのに。

リエンの態度をどうとつたのか。ゼンはふと寂しげに目を伏せた。見下ろすよりももっと下を。

「お前がそう言うとは思わなかった」

悲しみにくれたような、そんな彼の声音は低い。

リエンは、そんな師匠に一言も口を挟めない。言い訳であろうと、弁明であろうと、何も。

「お前、俺と二度と稽古はするな」

ぼそりと放った師匠の一言は、彼を突き放す。

リエンは何を言われているのかわからなかった。だが、押し黙った間は一瞬。言われた意味の重大さを理解する。

「どうしてだよ！」

リエンは飼い主に抗議する犬のように、必死に師匠に噛み付いた。

そうされる理由をまだ、彼は見つけられなかった。

「まだ分からないのか。答えは自分で探せ。ともかく、俺はそんなお前に」ゼンはリエンに背を向ける。「失望した」

規則も守らない、愚か者には用がないとでも言うような捨て台詞だった。

振り向かず、速足で去る後ろ姿はあながち冗談ではないようだ。

本当の意味で信頼していた師匠にも見放されて、リエンはただ茫然と立ち尽くす他なかった。

「ローシェ。フーの具合はどうだ」

「ゼン師匠……」

ローシェよりも先にフーが答えた。師匠に介抱される身体をかすかに持ち上げて、いつも声よりも小さい声でも、言った。

不気味に静まりかえった稽古場でもそれは響き渡る。

「この試合は、どうなるのですか？」

「お前の勝ちだ。反則を犯した馬鹿がいるからな」

馬鹿者を一度も振り返らず、さも当たり前のようにゼンは答えた。

それで終わりのはずだった。

「待ってください。まだやれます」

フーの口からでた言葉に皆が驚いた。

「私の怪我は、リエンの怪我と同じくらいだから」

フーは何故か必死だ。まだ、決着はついていないと言わんばかりに身体を起こす。

「怪我？」

「先程、師匠がリエンを殴ったじゃないですか」

フーは、決意したかのように平然と立ち上がる。

「お願いします。やらせて下さい」

痛みなどないかのように、平然と構えた。

彼女らしくもない。

「まあ、お前がそう言うのはいいんだが。ローシェ。お前は思うう？」

「僕はいと思うな。フーの意志を尊重する。けど、無理しちゃダメだよ。君がだめだと思ったら、すぐに僕は止めるからね」

「はい」

「よろしい。竹刀を持ってくるからここで待っててね」

吹き飛んだ竹刀をローシェが拾いにいき、フーにそれを手渡した。

「頑張るんだよ。納得いくような試合をしてきなさい」

今まで起っていた事態など気にしないような、のんきな言い方に、フーも面食らった。

当事者であったはずのリエンはまったく無視されて。

「試合再開だ。規則は言ったとおり」

ゼンは振り向き、ふて腐れるリエンと正対した。

「リエン。お前も異存はないな？」

まだ、声音は強い彼。リエンは考える暇なく、うなずいた。

今度こそ、本気で彼女はやってくるのだろうか？ 竹刀を見つめ、軽く握りなおしている彼女の顔はうつむいていて見えない。

「じゃあ、構えろ」

苛立たしげに言うゼンに、リエンは慌てて構えた。また、師匠に怒鳴られそうで嫌だった。

どうでもいいことですら、きつかけは作りたくないけど、怖がる素振りを見せたくはなかったから何もないように装う。

その二人がお互いに通り過ぎる時、リエンは一言だけ、ゼンに声をかけられた。

「お前の実力はこんなものではないだろうが」

第八話：覚醒、全て

ゼンの一言がリエンを混乱させた。

ぼそりとした、まるで独り言。普段ならそのまま聞き流してしまいそうなのに。

耳に残ってしまう。

どうして俺を応援するんだ？ と。

二度と稽古をするなど言っただけなのに。彼の行動に失望してはいけずなのに。

それに、フーの行動もおかしい。本気でやっていなかったのに、どうして続けようとする？

そのままだったら、何もしないでも勝っていたはずなのに。

しかし、くよくよ悩んでいても仕方がない。

リエンは再びフーと正対する。

ぞくりと鳥肌が立った。思わず一步後退したくなるような、リエンを押し潰すかのような、漲るような威圧感は間違いなくフーから放たれていた。

背筋が強張るような敵しさに息を飲む。師匠と稽古している時も、いや誰と稽古していても、今まで一度も体験した事がないような感

覚だった。

その雰囲気は怒りではない、夜の森のような静寂のよう。ひ弱な印象を受けていた彼女の目からは、すべてを射ぬくような、強い眼力が備わっていた。

無論、それはリエンに向けられている。

続けようとしたのは、彼に対して本気を示すためだったのだろうか。

少なくとも、リエンは、そう解釈した。その間にも、知らず知らずのうちに喉が乾いていく。

首筋に流れる汗の一滴も感じられそうな程、感覚が鋭くなり、視界が彼女だけをとらえていく。

何も考えられないまま竹刀をさらに握りしめる。怒りなんて、沸き起こる暇さえ見つからない。むしろ、碎かれてみじんと化す。戦慄さえ、感じてしまいそうになる。

正直、逃げ出したい。

未だ、力量差があるゼンと稽古していても、そんな気持ちになったことは、一度もなかった。

これが、本気をだした彼女の姿なのだと。

体験したことのない、異様な雰囲気慣れる暇もないまま、ゼンの手で、始まりの合図が再度、示された。

試合の展開は前回とは、間逆だ。のっけから、音もなくフーがリエンとの距離を詰めていく。

そして、先に打ちこむのも、彼女。

リエンほどの勢いはないけれど、フーは的確にリエンを追い詰める。熟練した職人のような、絶え間ない連続攻撃をぎりぎりで、彼は受け止める。手がまったく読めないのだから、攻撃できる暇なんて全然見つからない。

間の悪い事に、今になって師匠に殴られた腹が熱を帯びたように痛みはじめた。熱くなるにつれて、動きが少しずつ鈍っていく。フーの打撃に少しずつだが、反応が遅れ始めた。打ち込まれる間が段々と狭まっていき、竹刀に込められる力も弱まっていくと同時に、無表情を決め込んだ顔にも苦痛の色があらわれはじめる。

何度目かわからない打撃を受け、リエンの集中が僅かに、切れた。手がしびれ、彼女に向けていた竹刀があさつての方向に向いた。

明らかな空白、隙ができる。

ほんの数秒だけ。

それでも、埋められない隙が。

彼女がそれを逃すはずがない。

隙を見せたリエンに、流れるような動きでフーはためらわずに振

りかぶる。大振りでもなければ、小振りでもない。けれど、生半可では受け止められない程度の威力を確実に与えるように。

絶体絶命の危機に、リエンは防御できる暇などなかった。そんな事など考えようとしなかった。

リエンは相討ち覚悟で、竹刀を下から風いだ。

どんな声を出していたらろう？

リエンは、無我夢中だった。身体が勝手に動いていた。今までにない感覚をその体中で抱き留める。全てを出し切ったような、そんな感じだった。

息をする音だけが、耳元で聴こえ、まだ、目に映る景色は同じまま。

満足感にも、敗北感にも浸る事なく、時が止まったかのように身体を動かせない。

決着はもう、ついている。目の前、いや身体のどこかで彼女の竹刀が触れていると思っていた。

やっぱり、フーにはかなわない。悔しくもなく、自然と認めていた。彼女に対する、ひがみなんて、もう消え去っていた。

ここまでの實力を見せてくれた彼女はすごい。

「そこまでだ」

ゼンの宣言を聞いて、ようやく堰を切ったように視界が開ける。

「リエンの勝ちだ」

リエンは耳を疑った。そこで気が付く。

フーは竹刀を振っていない。振りかぶったままの姿勢で固まっていた。

リエンの竹刀は、フーの首筋に沿って止まっているにもかかわらず。

何が起こったのか、直後の彼には理解できなかった。

第九話：ざらざらな気持ちと真実

一礼をして、興奮が冷めはじめた頃。夢中になっていた理性が正気を取り戻す。初めて、リエンは自分が腹立しい気持ちを抱いている事に気付いた。フーをきつ、と睨み付けた。

彼女は彼の視線など関係ないかのように、気付いていないかのように、じつと下を見つめ続けていた。

何、手加減してんだよ。リエンは、周りに人がいるのに唾を散らし、怒鳴りかけそうになる。

彼女が、最後だけ手を抜いていたのは明らかだった。とどめなんて、彼が仕掛ける前にいつでもさせた。彼女が勝っていたはずなのに、実際は彼が勝ってしまった。

周りがどう思おうと、リエンは納得していなかった。

そこまでして、俺をこけにしたいのか？

その前に

「師匠、水を飲んできていいですか？」

素っ気ない態度を見せていたフーが、ローシェにおずおずと尋ねた。

「フーの好きなときにいつでもいいよ。今は稽古中ではないからね。それよりも、よく頑張ったね。お疲れさま」

ローシェはのんびりと答えた。試合の結果など、これっぽっちも気にしていないようだ。

「そ、そうですね」

何故かフーは慌てていた。けれど急がず、普通の足取りで、水飲み場へと消えていった。

それを横目で見届けたリエンは、ゼンの元に足を運ぶ。

「勝ちました」

稽古を付けないと言われたが、師匠はゼンだ。結果は報告しなければならぬ。けれど、嬉しいとか、苛々するといった感情をこもらせなかった。あくまでも、平坦に言った。

「そうか」

ゼンも素っ気なかった。頑張ったとか、よかったとかそんな、ローシェのようなねぎらう言葉も言わないで。会話は、それだけで終わった。逃げるように、リエンはゼンの前から立ち去った。

リエンも、フーと同じように水道場に行きたかった。額に浮かぶ汗が流れ落ちて、目に染みる。服の至る所が汗で濡れ、膨れ上がるかのように蒸れた。頭から、水を被ってさっぱりとしたかった。

けど、フーがいなくなってからでいいや、と我慢する。今、鉢合わせをしたならば、彼女に酷い言葉を浴びせかねない。それに、あんな奴と一緒にいたくない。

周りで見物していた仲間達が祝福にくる。彼らが言ったことは全て似たり寄ったりだった。大体が、フーがリエンと戦うなんてまだ早い。それに、フーが負けて清々する。実力なくせに、と悪意をこめたようなものだった。師匠に可愛がられているとは、二人ともまだ、道場内にいたから、そんなこと言う人はいなかったが、言外にそれを匂わせる人はいた。

だけど、リエンはまったく、そうは思わなかった。

絶交する前も、かなわないかもしれないと感じたこともあるけれど。

二度目のフーは違った。一回目が、まるで様子見としか思えないほどに。

それなのに、とどめを差さなかった事がリエンは、もどかしく、腹立たしかった。彼にだけ、実力を見せつけたようにしか、思えなかった。

彼らとの会話をほどほどに切り上げて、水道場に向かおうとした。

もうそろそろ、フーもいなくなっていることだろう。

.....

水飲み場は、道場の脇にある。

簀の子を敷いた通路を挟んで、蛇口が手前から奥まで列を作り、水を求める彼らを待ち受けている。

木の板を踏みしめて響かせた渴いた音がやむ。リエンは足を止めた。

なんだよ。まだいる。リエンはこっそりとため息をついた。

一番手前にフーがいた。水を出しっぱなしにして、頭に水をかけているその姿は、端から見ると、うなだれているようにも見える。

負けたのがそんなに悔しいのか？

煮えたぎらないような気持ちを秘めたまま、それでも彼女を無視する。彼女の後ろを通り過ぎから三つ先の蛇口の前に立ち、頭から水を被った。けれど、全然気持ち良くならない。体中の汗が気持ち悪いように、はいつくばる嫌な雰囲気。

早く戻れよ。そう願いながら、リエンは頭を水に浸した。

それでも、居心地の悪さは消えなかった。

とにかく、水を勢いよく被ることにする。目を瞑り、雑念を振り払おうとした。ゼンがよく行っている行動だ。

研ぎ澄まされた五感、別の何かを捕まえた。

それは、こっそりと聞こえてきた。啜り泣いているような、呻くようなそんな音。

リエンは、フーがいる方向に首を向けた。

確かに、その方向から流れてくる。

鳴咽と共に、フーの背中が一本の糸のような水に打たれながら弱々しく震えている。

リエンの心の中で糸が切れる。

怒りだ。

本気を出して戦わなかった、フーに対して。

それなのに、今更になって一人になって泣いている事に対して。

「なんで、泣いてるんだよ？」

彼女のいる方向に顔を向け、自然と口からでた言葉は燃え盛るような気持ちを押さえるように、でも彼女よりも震えていた。

「お前が強いつて事は十分に分かったよ。俺がお前を打った後、お前、本気だしてたよな。俺は攻める暇さえなかった。なのに……」

拳を握った。見据えていた目をさらに見開いた。歯を食いしばり、のど奥から、声を振り絞る。

「どうして、手を抜いたんだ！ 答えるよ！！」

あらん限りの怒鳴り声。それは、昔、彼女に怒鳴りつけたよりも、大きかった。

彼女は、反応すら示さない。何も聞こえなかったかのように、嗚咽を漏らして動かない。

「なら、どうしてこんなに悔しがってんだよ？」

リエンはフーに近づく。服に吸い込まれた水がぼたりと地面に水滴を作る。濡れる両手で肉付きの薄い彼女の肩をつかみ、無理にでもこちら側に向けようとした。

抵抗を見せるかと思った。けれど、フーはリエンにつかまれるがまま、こちらを向く。

こんな時にだけ素直なんだな。とリエンは思った。

フーの肩を持ち上げ、向き合わせようとして。

彼女は、悲鳴のうめき声をあげた。

向き合った顔をしかめながら。

「おい！ どうしたんだよ！」

目の前で起こった異変に彼はようやく気がついた。

繰り返される浅薄な呼吸。

リエンの手よりも一回り小さい両手が右の脇腹に添えられていた。リエンが打ちこんだ箇所。水に濡れて透けた服から覗く素肌、脇

腹の赤い楕円が目立つ。

長い間、水に打たれていた顔は、影が差したように青い。体中を小刻みに震わせ、必死になって痛みに耐えていたのだ。

「フー！」

他になすすべもなく、リエンはただ、フー呼び掛けるようにして肩を揺さ振っていた。

ぐったりしていた彼女の目が微かに開く。

「リ…エン……？」

振り絞るような声。

「お前……」

何か、言葉を返そうとした、その矢先。

「い…めん……ね」

蚊がささやくような声だった。謝り、リエンに寄り掛かっていた身体を起こそうとして失敗した。辛うじて開いていた薄目を閉じて、また意識を失う。

しなだれかかっていた身体を彼が抱き寄せた時、涙声とともに水ではない水滴が滴り落ちた。

リエンは、あまりに冷たくなってしまった彼女の脇で自分の過ち

を悟った。

フーは、あの時、ひどい怪我を負ったのだ、と。

でも、なんで謝るんだよ。

怪我させたのは俺なのに。

第十話：告白と懺悔

「大変だったね。とにかく感謝する」

場面は、医務室の前の廊下。

いつもの穏やかさを崩さないローシェがそこに、リエンとともに立っていた。リエンがフーを運んだ後に呼んだのだった。

けれど、どうして取り乱さないのだろうと、リエンは不思議に思った。

フーが倒れた後、自分は無我夢中だったのに。

彼女を背負って、医務室へと運んで、イエに何があったか説明して、ローシェを呼びにいつて。

他にもすることはたくさんあったはず。けれど、見当もつかない。疑心暗鬼と言ったらそれまでだ。

「とにかく座ろう。疲れただろう？」

ローシェはいつもの調子で、近くの長椅子を指さした。

「ロー師匠が先に座ってください」

リエンは下を向いて言う。頑なな態度を崩さない。ローシェと目を合わせたくなかった。自分がしたことを分かっていたから。

「いや。座りなさい。命令といえば、座ってくれるかな？」

命令と言われては仕方がない。渋々と、座った。

床の一点を見つめる。染みの点々が目についた。まだ消えない、フーの身体から落ちた水滴の数滴。

「どうして、リエンが落ち込んでいるんだい？」

椅子に座る気配すら見せないまま、ローシェはリエンの隣から尋ねた。

膝に手を置き、ようやくリエンは拳が震えていることに気が付いた。

怖いから。

何に對して？

自分の中に問いかけたそれを、リエンはそのままにした。まだ、向き合いたくなかった。

「そんなの、分かっているでしょう？」

「フーの怪我を見抜けなかったな。師として情けない。弟子の状態は常に把握したつもりだったけど」

「ロー師匠のせいじゃない。悪いのは、俺だ。力一杯にフーを叩いたから。そうしなければ、こんなことに……」

「ならなかった。そう思っかな？」

ローシェは言葉を引継ぎ、冷ややかに尋ねた。

「当たり前でしょう」

うなだれるリエン。

「身体の調子が悪いと、すぐに伝えなかったフーが悪いとは考えないかな？」

「そんなことない!!」

吐き出してから、しまったと悔やんだ。師匠に対して、怒鳴るって何やってんだ。と後悔する。

「すみません」

「いいんだ。気にすることはない」

そのように言うローシェは、掴み所がなかった。穏やかに振る舞っているように見えて、内心何考えているのか分からない。

ローシェとは腹を割って話すような仲ではなかった。そのような関係は、ゼンと結んでいた。しかし、師匠であるゼンにあのように喧嘩してしまった今、彼しか頼ることができる大人がいなかった。

「俺の話、聞いてくれますか？」

「聞かれたくない話かな？」

リエンは、下を向けていた顔をさらに向けた。ズボンをさらに力強く握りしめ、手が微かに震え出す。

「わかった。イエみたいに聞き上手ではないけれど、力になるう」

ローシェの言葉に勇気付けられる。けれど、まだ決心がつかない。のどまで出かかっていたそれは、未だ言葉になりそうにない。

行き場をなくし、ただ我慢するように震えていたリエンの両手が動きを止めた。

「ロー師匠？」

「これで、少しは話しやすくなるかな？」

リエンの両手を包み込むように、ローシェの手がつかんでいた。

ためらい、言いあぐねる弟子を彼は優しく見守っていた。

「大丈夫だよ」

その態度と言葉に背中を押され、リエンは、口を開いた。

「フーが憎い」

たったそれだけなのに、言えなかった、毒毒しく、自分が闇色に染まっていくような言葉。

ゼンが聞いたら怒るだろう。潔白すぎる程、彼は真っ直ぐだから。

嫉妬や妬みなんて、まったく感じられないし、見たことがなかった。

「どうしてかな？」

口調は、そのままなのにローシェの纏う雰囲気が変わった。

「怒りますか？」

ローシェの態度にややリエンは怖じけづいた。いつもの穏やかさと違って、喉元に剣先を突き付けられるようだったから。

「いや、好き嫌いは怒るような問題じゃない。怒っても何も変わらないからね、ただ」

淡々と語るローシェ。

「真剣に聞こう」

そこに穏やかな雰囲気は一欠片もない。張り詰めた緊張感が支配する。

「どうしてかな？」

口先だけが穏やかなローシェに茶化すような雰囲気はどう見ても感じられない。だから、リエンは心の内を訥訥と話し始めた。

「フーは俺と違って、稽古始めたのがつい最近で、俺は容赦なく打たれてるのに、それなのに……」

言葉に詰まる。言いたくない。

「それなのに？」

言葉の先を促す、ローシェ。本当に言いたくない。けれど言うつし
かない。

「フーは、俺なんかよりもずっと強い」

心で思っけていても、口になまで出した事がないものだった。

「皆がフーの事、馬鹿にしてるけど、一番頑張ってんのあいつなんだ。だから、ロー師匠とも、互角に打ち合えるんだ。だけど、認めたくない。俺だって、フーに負けなくらいに稽古してるのに。それも、ずっと前から。今日の試合だって、知らされてから、どうすれば俺が勝てるかって、ずっと考えた。だけど」

「もういい」

ローシェが止めた。リエンは知らず知らずに目が潤んでいることに気が付いた。けれど、身体まで震え始めていたことには気付かなかった。

フーが自分より強い事を認めたから？ いや、やっと自分のやったことの重さに気が付いたから。自分はまだ、未熟者だと知ったから。

リエンの身体が予期しない方向に動く。リエンは、心臓の鼓動を感じた。

「よく話した。もう大丈夫だ」

ローシエが優しくリエンを抱き締めていた。とても暖かい。

「ロー師匠？」

「自分の弱さを認める事は難しいことだよ、リエンは偉い」と優しく彼の頭を撫でた。

今まで、誰にも明かす事が出来なかったものを吐き出して、肩の荷が下りたのだろう。リエンは堰を切ったように涙を流した。ローシエは涙が染みを作っても構わない様子で、リエンを包みこむように優しく抱き続け、彼が泣きやむまで待った。

だけど、とリエンは泣き止んでからローシエの胸にあてていた顔をあげた。「強いとか弱いって話したら、なんだそんなことかって言われると思いました」

「僕も、そうだったからだよ。ゼンに敵わないって悟るまですごい時間がかかったからね。リエンよりも、もっと長い時間だったよ」

「ロー師匠が？」

ぐずつきを段々と無くしながらも返した。

「僕らがリエン位の歳だった時、僕はゼンより強かった」

えっ、と。リエンは驚いた。確かに、今はゼンは最強だと言われていたが、それでも意外だった。筋肉隆々の師匠と、適度に痩せて彼と比べたら華奢に見えるローシエを比べて見れば、どちらが強いのか、一目瞭然だった。

「手前みそだけどね。実力差は、君達よりも開いていた。ゼンは毎回、稽古で負けるたびに悔し泣きしてね、代わりにいつも素振りとか、腕立て伏せとか僕と張り合ってたんだ」

ゼンの負けず嫌いは、稽古していてもすぐにわかるけど、そこまですだったとは思わなかった。

「いつも張り合うから、僕もつい意地になつてね」

意地を張るローシエを想像できなかった。適度に自分のペースを通すような印象を持っていたから。

「限界までやった。だけど、ゼンは必ず僕よりも三十回余計にやるんだ」

三十回つていうささやかな回数にほえましさを感じた。だけど、限界までやる辛さは、リエンにも分かる。それを、意地でもやり通していたゼンを、リエンは素直に凄いと感じた。

「どうって事ないと思った。たかが数回やった所で何かが代わる訳でもないってね。けれどね」

ローシエは、上を見上げた。

「ある時から、負け始めた。それ以来だ、ゼンに負けるようになってのは」

リエンに対して、何通りにも意味が取れそうな苦笑いを浮かべた。

「本当に勝てなくなった。どうして、負け始めたのかって考えると、結局は練習量の差に行き着くんだ。ゼンは、僕よりもずっと頑張った。だから、ゼンは強いんだと思うんだ。今はもう、ゼンとはこっそりしか戦わない。弟子達にみつともない姿は見せられないからね。リエンも心配しなくていい。いつか、フーに追い付く日がきつってくる。ゼンも最近、リエンが腕を上げてるって驚いていたよ。リエンが一生懸命やっているのは、僕もゼンも認めているよ。」

それに、君達二人の力量差はそんなに開いていないさ。だから、大丈夫」

穏やかさを取り戻したローシエが優しい眼差しをリエンに送る。

褒められたリエンは、恥ずかしそうに鼻をてっぺんを掻いた。面と向かって、褒められるのは、とても照れる。

ローシエはそんな彼を見て、リエンの名前を呼んだ。

照れるのを一時止め、ローシエに向き直ったリエンは。

「っ……」

本当に間一髪だった。

鼻先を指がかすめる。ローシエの右手だった。まるで、頬を張るかのように手の平を目一杯に開いて。のけ反りながら、リエンはなんとかかわした。

「ほら、不意打ちしてもかわせるようになっただろう？ ゼンと稽

古している成果だ」

手の甲を見せながら、声音を変えず、平然としたローシェ。

リエンは肩を反らせたまま、体勢を崩したまま動けない。

「本当だ」

それしか言えない。

「恨みと憎しみをこめたんだけどね」

さらりと、どす黒い感情を曝す彼。

「へっ?」

「誰だって、弟子を怪我させた相手に対して生半可な気持ちは持たない」

声に穏やかさは消えていた。刀のように冷たく、平板だ。

「ロー師匠……」

そう言った所で、ローシェは目を合わそうとはしなかった。

「ごめ……。そう言いかけてリエンは口を塞がれた。とても優しく、包み込むように。」

「それは、フーに言うことだよ。僕に言ったって、何も変わらない」

諭すように話すローシェ。不穏な空気は消えていた。「それに、さっきのは冗談さ」

悪戯に片目をつむるローシェの態度にリエンは、ほっと胸を下ろした。安堵感が次の言葉を容易に口にすることができた。

「だけど、フーは手加減したんだ」

「手加減？」

意外な言葉にローシェは驚いた。

「叩いた後と前だとフーの動きが全然違った。それに、止めをささなかった。それに、あいつは、叩いた前も手を抜いてたんだ」

「リエン」

たしなめるような、ローシェの声。

「なんです？」

「どうして、フーがそんな行動とつたのかわかるかな？」

リエンは眉根を寄せた。「そんなの……」フーは、相手を馬鹿にするような酷い奴で、と言おうとしたがまさか師匠の前でそんな事は口走れない。

ローシェは微笑んだ。

「いつの日か、リエンはこう言ったね『ロー師匠はずるい。フーの

事、稽古で叩かない。ひいきじゃないか』って」

まるで昨日のことのようにローシエは言った。

ずっと前に言ったにもかかわらず。

「覚えているんですか!？」

「面とむかって言われたからね、それにいつか答えようとしていたんだ。今がその時だ」

ローシエは天井を見上げた。リエンもその方向を見上げた。

「フーは自分がどんなに辛くても、我慢してしまう事がよくある。どういう意味かわかるかな？」

リエンは頷き、言葉の続きを待った。

「あの子は、いらぬ痛みでさえ知らない内に引き受けてしまう。しかも、彼女は胸が裂ける程辛いつて思っているけど、自分から助けを求められないんだ。いや、求められる環境にいなかったんだ。だから、僕はフーを打つ事ができない。少しでも、彼女が安心できるように尽くして来た。皆、同じような境遇だけど、どうしても彼女には甘くなってしまう。僕もまだまだだ」

ローシエの滅多に見せない張り詰めた雰囲気を押され、リエンはただ、独白を黙って聞いているしかなかった。

第十一話：からかい、対面

ばんと目の前の医務室の扉が開き、向かい合っていた二人は、首をその方向に向けた。

「リエン。お姫さまの治療は終わったよ。早く、見舞ってやりな」

見た目とは違う豪快な口調だった。絹のような光沢をなびかせる黒髪を持つ美人。白衣を身体に纏っていても、あらわになるシャープな身体の線。黙っていれば、どこかの富豪の令嬢と紹介されても納得できるほどの容姿なのに、その男っぽい口調が深遠な外見を打ち壊す。名前は、イエ。この道場の医者だ。

今も、彼女は小作りな顔に不釣り合いな、大きい黒色の瞳を興味深げにくりくりと動かしている。

「あれ？ ローシエ。何やってんの？」

それでいて、両師匠と同年で幼なじみ。

「フーのことが気になってね」

「外、雨降ってんの？ 服が濡れてるけど」

リエンはどきりとした。泣いていた事をあまり知られたくない。

「降ってた」

ロー師匠は平然と嘘をついた。

ナイスフォロー！

イエさんは、二人を見比べる。何故かほくそ笑みながら。

「へえー。まあそういうことにしますか。さあさあ、入った。で、ローシェ。後で話があるけど、時間ある？」

イエさんは、ふと顔を強ばらせた。

「あるよ」

ローシェが穏やかに答えた。

.....

医務室。とはいっても、その中には、小部屋が三つある。

真つすぐ突き進むと診察室。

右にある部屋が物置。

左にある部屋にはベッドが何個か置いてある。

リエンは、滅多に医務室にはこない。だから、イエの後を付いていく。

入り口から見て、左側の部屋に入った。

「フー。調子はどう？」

イエが気楽に声をかける。彼女は、誰とでも打ち解けて話す事ができた。

「来るのが遅いよ」

駄々をこねるようなフーの声。でも、リエンは、一度も聞いた事がないような、そんな声音。

「いいじゃん。いろいろあってさ」

イエは二、三歩、歩いて窓辺に腰掛けた。晴天だった空は、曇りかけているようだ。イエの影が部屋の中に薄く伸びていた。

「お客さん」

フーはリエンを見た瞬間、少し目を伏せた。

リエンはどのようにすればいいのか分からない。ただ、黙り込むしかない。

ベッドの上で上半身を起こした姿勢のフーは、健康そうに見える。ただ一つ、痛々しそうに、巻かれているコルセットを除いて。

「別に、命に別状はない。だけど、肋骨の何本かにひびが入ってる。数日は、稽古を控えるべきね。」

丁度いいから、ここで入院すれば？　ずっと外で待ってた王子さ

まもいるみたいだし」

慣れたような説明口調でそういうと、意味ありげにリエンを見据えた。にんまりと目尻と口端が吊り上がった。

「とても、反省してるみたいだし」

リエンの中で、何か不穏な空気が渦を巻く。

「イエさん？」

「自分の弱さを認めることは、難しい事だよ、リエン」

その口調は、ローシェが先程リエンに言った事を丸写ししたようだった。

そして、リエンは全てを聞かれていたことを知る。当然泣き声も聞いているだろう。身体が熱くなる。リエンは、いまずぐにでもこの場から消えてしまいたかった。

「イエ、リエンは……」

「私が聞いてたの知ってたでしょ？ ローシェ？」

「ロー師匠!？」

「気付いていたのか」

「当たり前よ。私を誰だと思っている」 イエが胸を張る、その横でリエンは肩を落とす。

裏切られた気がした。

「男は泣けば泣くほど、男を上げるものなのよ。ゼンのように」

イエのフォローは、全然それになっていなかった。むしろ、フリーの前で言っただけでなかった。

フリーは、意味深な会話を続ける三人を見て、きょとしていた。

「リエン」

そっと、フリーは囁いた。リエンは動揺していた心を止めた。石になったかのように何も考えられない。何を何をすればいいのだろうか？

「えっと……」

フリーも、言葉に詰まっていた。

「ちょっと待った。二人とも、私たちがでてから始めて。いくよ、ローシェ」

口早にそう言つと、ローシェの肘を引っ張り、部屋から出ようとする。

「私もあんたに言いたいことがあるんだから」

「分かった」

ローシェは苦笑いをして、黙ってイエに引きずられていく。

「そうだ、フー」

「はい？」

「何でもない」女は、困惑の表情を隠さなかった。

「行くよ、ローシエ」

はいはい、と二人は退室した。ローシエが何かを口走る。同時に、イエが彼を引く力が強くなったように見えた。

彼等が去って、少し後に世界が破滅したかのような大きな音が聞こえた。

第十二話：伝わらぬ思いと謝罪

二人は、しばしお互いの顔を見合う。だが、何も言えずに共に顔を背けた。

沈黙。

リエンの心臓が稽古をしていないのに、激しく波打つ。恐れる心を押さえ、あらためて決意をした。

「ごめん」

フーの顔は見ずに、あえてシートを見つめた。いや、それしか出来なかった。真正面を向いて、謝る勇気が持てなかった。

「お前の事、怪我させちまって」

素直に謝ることができなかったけれど、彼は精一杯に謝ったつもりだった。

言葉を吐き出した後、また静寂が彼らを包む。彼女が何かを言うてくれなければ彼は動けない。

「謝らなきゃいけないのは、私のほうなのに」

ぽつりと、彼女は染みを作るかのように呟いた。その静けさの前で、リエンは反応が出来なかった。

「リエンが怒ってるの知ってたよ。水飲み場で、私を怒ったのも、

当然だよ。あの時リエンが言ってたの、合ってるから。だけど……」
彼女は顔を覆った。「リエンを傷つけない」

くぐもった声でも、リエンにはつきりと届いた。

「フー？」

「当たる寸前で止めるなんて私にはできない。それなら、私が負けてしまえば、リエンは傷つかないで勝つと思ったの」

「じゃあ、どうして二回目は本気だったんだ」

「お腹が痛くて、何が何だか分からなかったの。気がついたらリエンに竹刀を振り上げて……。あのまま振り下ろしたら、リエンが怪我するって。嫌だよ。リエンが痛がるところ見たくない」

「打てばいいだろ！」

フーはリエンの突然の剣幕に驚き、茫然と眺めた。

「俺は、お前と本気でやりあいたかったんだ。それなのに、傷つけるのが怖い？」

ふざけるな！

俺は、お前を超えようとして今まで頑張ってたのに……こんな勝ちなんていない！ そんなに傷つけるのが怖いなら……それならお前が心配しないで戦えるくらい強くなる。そうすれば、お前と全力で戦える。そうだろ？」

彼女を真っ直ぐに見つめ、力強く宣言した。そうだ、そうすればいい。

「リエンは今でも十分強いよ」

フーは、目を伏せた。

「なら、俺を殴ってみろよ」

リエンは、頬を差し出した。

「嫌だよ」

彼女は目を伏せたまま、首を横に振った。

「なら、俺はまだまだ」リエンは口を大きく横に伸ばして笑う。
「だけど、すぐにお前が認めるくらいにそうなってやる」

朗らかに言っただけ。怖がる必要などないのに、フーは俯いていた。両手でシーツを強く握って、耐えるように震えていた。

「違うよ。私が言ってるの」

声もだ。両手を緩め、シーツを握るのを止めた右手を左腕の袖にかける。

「私は、傷つくだけでいいの」

袖がためらいを見せながら、かさぶたをはがすかのように、まくられた。

それを目にして、リエンは言葉を忘れた。両目は確かに左腕に向かい、吸い付いていた。

大小無数のあざと引つかいたような傷跡が、肌を縦横無尽に走っていた。肌が荒れているから、とは到底言うことが出来ないほど酷く、醜かった。彼女の華奢な体とは釣り合いそうにもない。こんな傷を今まで見たことがなかった。

「こんなのが、右腕にも、両足にもあるの」

「痛くないのか？」

せいぜいがその言葉。啞然としたような、人並みの感想しか言えず、いたわりの言葉すらはけない自分に腹が立った。フーが傷付けない理由が凍みるくらいに分かった。誰だって、ここまで痛めつけられたら、ためらってしまう。

彼女は、今までどう思いながら過ごして来たのだろうか？ 衝撃に頭の中が霞みそうになりながら、リエンはそう思った。

「痛いに決まってる。だから、怪我させたくない。痛いのが分かるから」

「誰がそんなことを」

「そんなの分からないよ。昔のことなんだよ」

「この傷は何なんだ？」

まだ、色褪せない肌の下、ただれた赤い色が剥き出しになっている。が、よく見てみると、過去の傷が積み重なり黒ずむ皮膚の表面に、新鮮な色を保っている傷がうつすらと盛り上がっていた。こんな傷が昔からあるはずがない。

フーはとつさにその傷を隠した。しまったと言う前に、口を閉ざした。

「傷が新しかったぞ」

「関係ないじゃない」

彼女は、かたくなに理由を話す事を拒んだ。

でも、すぐに、リエンはどうしてそれができたのか思い当たった。けれど、信じたくはなかった。

彼女を身近な人物が傷付けたということ。

少なくとも、ローシェではない。彼は、彼女を傷つけようとはしないから。

ならば……。けれど、そうとしか、考える他なかった。

彼女は、虐められていたのだ。同じ道場の仲間達から。よく考えてみると、そうだ。リエンと同じように、入ってからすぐ、それも急に実力が伸びた彼女を妬む奴もいた。だから、試合が終わった後に、彼に祝福をしにきた道場生がたくさんいたのだ。

だったら。

リエンが教えられた、フーの言っていた悪口は？

どうして、あの二人があんなことを言ったのか？

まさか……けど、信じたくはない。

嘘？

「もしかして、俺が言われた悪口も、本当は言っていないのか？」

フーは布団を持ち上げて、口元と身体を隠した。答えないみたいだ。

だけど、そう考えてみると、彼女の行動はつじつまが合うように見える。

あえて、嘘を言った兄弟子を庇うことで、リエンがそのことを嘘だと知るなら、兄弟子に落胆を覚えるよりも彼女に落胆を覚えたほうが、シヨックは少ないだろう。傷つくことを厭わない彼女なら、そうするだろうと考えるのは。まだ幼いリエンでも出来たことだった。

「お前、馬鹿だよ」

「私が、全部受ければ、それで済むから！」フーは、リエンの一言を塗り消すかのように叫んだ。「それで、済むから……」

「済まねえよ」リエンは打ち消す。まだ、布団で身体を隠すフーをねめつけた。「俺が納得いかない」

フーを見据えたまま、リエンは窓際まで足を運ぶ。その足取りに迷いはない。

何をするのだろう。フーは疑問を感じた。

「よく見てろよ」

リエンは、右手を窓に突きつける。

彼が今から、何をするのか？ フーは、すぐに理解した。

叫ぶ彼の名よりも早く、手が窓を破った。蜘蛛の巣のように罅が走るその中心が、赤く染まる。

「痛くねえ、全然痛くないからな」

呪文を唱えるかのように、重々しく響くようなリエンの声。彼のどうしようもない気持ちを示すかのように流れ、溢れ出る血が拳を作る手に垂れる。それをフーの目の前に示した。

「もう、やめて！」

「嫌だ。お前一人に、そんな背負わせてたまるか。それに、俺はそんなに弱い奴じゃない、こんな怪我なんてへっちゃらだ。お前に心配される程、俺はヘタレじゃないんだよ」

本当は痛いはずなのに、そう、うそぶいた。

血に塗れた手を開く。手のひらに包まれた、ガラス片が一片。

右手に握り、それを、叫び声とともに、左肩に叩きつける。彼の利き腕に。

二度と竹刀がとれなくなるかもしれない。けれど、フーが今まで受けた仕打ちに比べたらどうって事はなかった。

フーが受けたどの傷に比べたら、こんな傷なんて何の痛みもないはずなのだから。

第十三話：行為、その果て

濁音が交じる悲鳴とともに、リエンの右手があらぬ方向に飛ばされた。リエンともども壁に叩きつけられ、崩折れた。

漆喰が剥がれ落ちて、リエンの頭にかぶった。床に倒れこんで、呻く彼を見下ろす大柄の男、ゼンが殴り付けた拳を震わせていた。

「この馬鹿弟子が！！」

「ゼン師匠！」

「フー。大丈夫か？」

リエンに対する態度とまるで反対だ。

「リエンが……」

「まったく、イエに絞られた後に来てみたら。何様のつもりだ？ お前は」

震える拳を抑え、腕をくんだ。

「弟子じゃなくなっただんじゃねえの？」

ゼンは一つ、大きなため息をつく、うずくまるリエンの背中を持ち上げた。片膝を折って、リエンの顔を覗き込む。

「誰が、弟子じゃないって言ったんだ？」

フーからは、ゼンの顔は見えない。しかし、リエンの顔が不貞腐れた顔から、息を飲んだような、驚きの表情に変わる瞬間を見ることができた。

「すぐには、見捨てないぞ。ここまで強くなっただからな」

「師匠？」

「馬鹿野郎。俺は、頭を冷やせと言いたかったんだ。悪かった。俺も興奮してて強く言い過ぎた。だが……」

強張ったような声色は無くなっていた。

「しかし、なぜこんなことをした？」

「それは……」

口籠もるリエン。

「それは、フーの傷跡を見たからね」

「イエさん」

「まったく、この鈍感」

誰のことを指しているのか、分からないような、イエの口振り。

「何度も同じ事を繰り返すな」ゼンが返す。

「昔からそうなのよ、困っちゃっわ」

肩をすくめるイエ。どうやら、ゼンの事らしい。

ゼンは、これ以上言っても無駄だともいうように口をつぐんだ。

「ど、ん、か、ん」

何も言わない彼をからかうように、イエは一字一句、丁寧に繰り返した。

「分かったよ、俺は鈍感だ」観念したようなゼン。

「認めたからって何も変わらないわ」

さらりと、イエは受け流した。

「じゃあ、何をすればいい？」

この質問にイエは答えない。「で、リエン。手、痛いでしょ？」
リエンに矛先を変えた。

「別に痛くない」やせ我慢だった。

「じゃ、治療しなくていいわね。ガラスの破片が、手に残っていると後が怖いよ。血管が身体中にガラスを運んで、中が切り刻まれるんだ」

イエは、ねじり上げるようにリエンの右手を持ち上げた。我慢していた痛みが、さらにリエンに加えられる。

苦痛で顔を滲ませながら、リエンは苦悶の声をあげた。

「いたくなんか……………」

それでも、彼は強情な口ぶり。痛い事を認めない。認めたくなかった。

「嘘つき」

その仕草を黙ってみていたフーが言った。

リエンが額に汗を浮かべながら、そのように言う彼女を見すえた。

「本当に痛くないなら、こんな辛い顔しないもの」

「痛くねえって！」

あくまでも、強情に振る舞う彼に

「いつてえ！！」

イエが、空いた手で頭を殴った。空手で使う突きのようなだった。

「ほら、本当は、痛いじゃない」

適度に力の抜いた、普段通りのイエだが。

その手に瞬く間に容器を装備した。リエンの手から流れる血よりもさらに、赤黒い液体が半分程度入っていた。

ラベルには、こう書かれていた。『消毒液』と。

もう一方の手には、ガーゼが。

「ていつ！」

かわいらしく掛け声を発したイエはその態度と裏腹に、リエンの手にまだ握られている、ガラスの破片を力任せに取り去った。

血に塗れた右手を、消毒液をたっぷりつけたガーゼでさっと拭いた。

「%#&*@φ！」

リエンが跳んだ。ひざ頭を床につけて着地した。握られた手の高さは変わらないけれど。

「
」

横目で見ていた、二人とも声を失う程の荒療治だった。

窓を突き破る時に出来た傷がまた、刺激された。

「これで、一応大丈夫よ、ガラスが身体中に回ると大変だけど、消毒しないと傷が悪くなるから」

まだ痛がるリエンを心配しないで、さばさばと説明した。

「お前の治療は、もう少し丁寧に出来ないのか」

「馬鹿につける薬は、これしかないわ。で、これで、フーの痛みを知ったのかしら？ 君は？」

まるで、幼児に教え聞かすような、おどけているような声。

どうにか、少し痛みがなくなったりリエンは、イエを涙目混じりに見上げる。「すごく分かった」

「な、わけないでしょ」再度、ぽかりと頭を殴る。「痛みを知ってどうするのさ？ その傷は結局は消えるよね。痛みなんて当然無くなるわけだし。だけど」

イエは、殴り付けた手でリエンの顎を持ち、頭をフーに向けさせた。「あんたがそんなことして、この子の傷が、すぐに癒えるなんてことはない」黙りこくるフーが目に入る。「ずっと独りぼっちで、誰にも助けを求められない。どうしようもなく、たたずむ他するところが無い。あんたに、その気持ちが分かるかな。劣等感とかじゃないか？」

勿論、あると言おうとした。そう言おうとしたが、隙間が見当たらない。

「独りぼっちだったフーがさ、やっと信頼出来るようになったのが、リエン。あんただだったんだ。そんなあんたがフーの目の前で嫌いだって言った後、またこの子は独りぼっちになったわけ。」

信用してた相手がいなくなった後って、独りになるのが怖いんだよ。それが、相手の為を思っただけでもね。その日、この子私に会ったらその場で、泣き始めたんだから」

「やめて、イエさん」

「あんだだつて、この鈍感に突き放されたら寂しくなったでしょ？」
イエは、見境なく続ける。「それならさ、フーを守ってみたらどう？ ちんけに謝ってそれで終わりにするよりは、フーがこれ以上傷つかないように支えてみたほうが、よっぽどいい」

「俺が？」リエンは目をしばたいた。「だけど、俺はフーよりも弱い」

「何が弱いよ。私は、あんだ達よりも弱いわ、でも助け船はだせる。強さなんて別になくて大丈夫よ」

「イエさん……」

「フーが今まで受けた傷を治すことよりも、あんだがフーの支えになるほうがよっぽど価値があるし、それだけでもこの子は楽になるそれに……」イエは爽快感な笑みを浮かべた。「オトコノコがオンナノコを守る。恰好いいじゃない。これこそが武士道ってもんよ。それに、フー」

急に名前を呼ばれた彼女は、慌ててイエに視線を移す。

「あんだも、自分の辛さを分けなさい。それで、そうした相手の辛さと交換するの。そうしたら、お互いにすごい楽になるんだから。遠慮してちゃだめ。というより、こんな傷を実感したい奴なんだし、どんどんぶつかっちゃいなさい」

イエは、フーに向かってふと微笑んだ。

「私の負担も減るし」

そう言ったイエの意図をなんとなく気がついたフーもまた、微笑み返した。

「それが目的か」何も気付かないゼンが呆れたように呟く。「昔からそうだ」

「だから、あんたは鈍感なの。それに、あんたも昔から私に泣かされたくせにさ」

「関係ないだろうが」

「ローシエに負けた後にいつも慰めてあげた、殊勝な私は誰だっけ？」

「俺が泣いたのは、お前のせいじゃない」

「打ち身つくって消毒したときに泣いたじゃない」

「それと、これとは話が別だろう」

リエンとフーは、突如として始まった幼なじみの口喧嘩を啞然として眺める他なかった。

その中でも。

「リエン」リエンにしか聞こえないくらいか細い声。だけど、彼にははっきりと聞こえた。

「なんだ？」

「ごめんね。私のせいでこんな事になって」

フーは、リエンの方向に身体を向ける。リエンには、彼女の顔が見えない。

「なんで、謝るんだよ」

リエンは、その手を左手で握った。驚いたようなフーの顔がリエンの正面を向く。

「だって……」

「おまえが悪い所なんて、一つもないじゃないか。だから……」

彼にとっては、顔から火が出そうなくらいに恥ずかしい言葉だったけれど

「お前を守るようになる、いや守るようになる」

これ以上フーが傷つかないように。リエンはそう決意した。

「ありがとう」

少し、間が空いてから、フーは笑った。ここにリエンが来てから、彼に対して初めて。

リエンにとって、久しぶりに見る彼女の笑顔につられるように、

口を釣り上げた。

「ほら、一見落着」イエは一人で拍手をした。「二人はラブラブになりましたとさ。めでたしめでたし」

二人は手を離れた。両者とも、そっぽを向いて頬を赤らめる。

「全部私のおかげね」

「かき回しただけだろ」ぼそりと、ゼンは言う。

「はー。疲れた」

背伸びするイエ。

「そうだ、ゼン。久しぶりに肩もんで」

「嫌だ」

「昔は、嬉しそうにやったのに。セクハラね。ピチピチな少女にエロい妄想をしてたんだ。変態」

「あーっ。わかったよ！やればいいんだろ？」

「二人とも、疲れた時は、ゼンに肩もんでもらったら？すごい効くわよ」

「一回…」

「なに？これからお金とろつての？ 最悪！ 最低！ あの世

の師匠もきつと草葉の影で泣いているに違いないわ!」

白衣の袖で目元を拭い、押し当てるイエだった。

「いや、悪かった。肩揉むから、泣くなって」

慌てふためくゼン。

「本当?」

「ああ、約束する。一週間心いくまでやるぞ」

「男に二言はないよ」

白衣を取り、ゼンに顔を向けるイエの顔は意地悪く笑っていた。

「だ、騙したな」

「騙したなんて人聞きの悪いこと言わないでよ」

幼なじみの息のあつた掛け合い。というより、喧嘩だった。

それでも、横で耳を傾ける二人は、お互いに隣を気にせず、素直に笑う事が出来た。

第十四話：三日後の後日談、その一

そして三日後。

リエンは、師匠と正対している。相変わらず隙が見当たらないゼンに対抗するように、竹刀を強く握る。彼が放つ威圧感に負けないように、睨み付けた。

ゼンがじりつと、動く。それを合図に、気合いをこめ真正面へ、駆け出した。

ゼンは、見越していたかのように上段から打ち下ろす。体感と経験則。駆けてくるリエンが、かわせないように。

そのまま、竹刀で受けたとしても、圧倒的な力の差によって弾き返されるだけだった。むしろ、攻めたはずなのに、その勢いを加えて、ゼンの打ち込みが返されてしまう。

だから、リエンはわざと足を滑らせた。

予想もしない動きに、ゼンの顔が驚きに変わる。

ゼンの打撃は、狙った所よりも下、振り切った所で鏢で受けとめられる。滑り、ゼンの足元で座り込みなりながらも、得意顔で彼を見上げるリエンだった。

弱まった打ち込みを、立ち上がった反動を利用して弾き返す。逆に斬り上げるように打ち返そうとして。

足を払われた。

へ？ 肩透かしを食らうような、意外な展開。

竹刀は明後日の方向を斬り上げ、足の踏み場がなくなったリエンは、竹刀に引つ張られるがままにバランスを崩し、床に叩きつけられた。

「痛っ」

一瞬の痛みを無理にでも忘れて、体勢をたて直そうとしたところで。

「それまでだ」

胸元に突き付けられた竹刀がリエンを押さえ付けていた。

「ずりい、師匠」

「戦う時は、全ての可能性を考慮。だが、こつもあつさりところけるとは思ひもしなかった」

押し殺さずに腹を抱えて笑うゼン。突き付けた竹刀を下げる。その逆の手で、リエンを立ち上げらせ、頭を鳥の巣のようになるまで強く、くしゃくしゃに撫でた。

「強くなったな、リエン。意表をつくとはな。それに、ぶれがなくなった」

「本当！」

リエンは師匠を嬉しさの交った表情で見上げた。

「それでもまだ、俺にはかなわないがな」

例えそうであっても、リエンは純粹に嬉しい。

「そうだ」と、思い出したように、はつとなる。「俺、医務室に行かなきゃ」

「そうか、行ってこい」

別に、咎める事なくゼンが了承し、リエンが、道場を飛び出したところだ。

「リエンは、強くなってるね。成長したら、僕らより強くなるはずだ」

稽古を後ろから、二人の邪魔にならない程度で、こっそりと眺めていたローシェが漏らした。

「越えさせねえよ。前々から、実力が伸びてるけどな」ゼンが振り向く。「けど、俺が圧されてるところをあまり見せたくない」

「イエにこき使われてるところも?」

「お前までいうのか?」

「昔からじゃないか」

ローシェは言葉を切る。少し、迷ったように

「けれど。このままだと……。ゼン。君は、本気をだしていた。リエンは今のままでもそこまで、腕を上げてるのだろう？」

「分かっている。だが、俺はあいつしかいないと思ってる」

「耐えられるかな？ 正直な所。僕は、難しいと思うが。彼らに、『あれ』を任せるのは酷だ」

「俺達も、いつくたばるかかわかんねえだろうよ。師匠だって、もうこの世にいないんだ」

有無を言わせないかのように、ゼンがまとめた。

「それもそうだ」

言葉少なにローシェが言った。けれど、その顔色は、曇ったままだった。

.....

ほら、ゼンは竹刀をローシェに投げた。

別段、驚く事もなくそれを受け取ったローシェ。だが、その長さを見て、口元を緩めた。

「随分と、準備がいいね。ぴったしの長さだ」

「あることないことリエンに言っただろう」

一方でゼンは、自分用の竹刀を握り直す。

「それがどうかした？」

「おおありだ」

ゼンは竹刀を軽く一振りした。空気を切り出す音が響いた。止めた先がローシエをさす。

「俺は、お前を越えた、なんて思ったことがないからな。なにが負けっぱなしだ。いつも接戦だろうが」

「けど、事実だろ」

「たかが数本で、なに言ってるやがる。最後に本気でやったの何時だ？」

イエにも怒られただろう。『わざわざ、弟子を使ってまでどちらが強いかなんて決めるな。馬鹿らしい』って。だから、そんな風に見られるんだ。

それに、俺ばかりが努力したように言いやがって。夜中にこっそりと抜け出して、ぶっ倒れるまで自主練してたのは、何処の誰だ？」

久しぶりに勝負。わざと時代がかった口調を見せ、ゼンは竹刀を構えた。

「言いたい事は、それだけかな？」

ひょうひょうとしたローシェの口ぶりにゼンは、顔を強張らせた。

「ああ」

「言いなよ」

「三十回くらいで、お前を越えられねえよ。そんなに、柔な奴が俺の目標の訳がない」

「言っていて、恥ずかしくない？」

「自分を過小評価する奴程恥ずかしくねえよ」

会話が止まる。

「……雨降って、地固まるとか言っていたのは、誰だったか」

つぶやくローシェ。別に断る理由は、ない。ローシェは久しぶりに全力で迎え撃とうと、普通より短い竹刀を構えた。だが、すぐに下ろした。

「やっぱり、やめにしないか？」

「どうしてだ？」

ほら、とローシェが耳に手をあてた、まるで音を詳しく聞き取るように。

ゼンは、ローシェの意図を察した。

「そういうことか」

ゼンが言う。けれど、その声音は納得がいかないようだった。

「だから、おあづけだ」

さも同然のように言ったローシェに対してゼンは、豪快に笑う。

「なあにがおあづけだ。場所を替えてやればいいだけの話だろ」

浜辺だ。わざわざ遅れる真似して破れたりなんて言わねえからなと、それだけ言い残して、ゼンは、入り口から出ようとせず、裏口へと向かった。

昔から、そうだった。いつも、決着がつくまで終わらせない。それがゼンだった。それに比べて……。

「そんなとこ突っ立ってないで早くこいよ」

ローシェは不意に我に返った。それから、意味深に微笑んで、ゼンの後についていく。

.....

リエンは、医務室の少し前で小走りを止めた。あがる息を整え、今まで歩いてきたかのように医務室まで辿り着いた。

「失礼します」

部屋の主が答える前に、扉を開ける。

誰もいない。

「イエさん？」

呼んでも出てこない。あれ？ リエンは首を傾げた。イエさんがいつもいる部屋は真つすぐ進んだところ。しかしリエンは、病室をこそそそとのぞいた。誰もベッドで寝ていない。

「何やってんの？」

不意を突かれ、頭を叩かれた。気配さえなかった。後ろを振りかえる。両手一杯に書類を抱えた部屋の主が立っていた。書類で叩いたのか、何十枚もあるそれが、髪の毛のようにたわんでいた。

「イエさん！ 今まで何処にいたんですか？」

頭を叩かれたとはいっても、師匠の打ち込みよりもずっと痛くない。むしろ、いつの間にか後ろにいた、彼女に驚いた。

「野暮用。で、あんたは何やってんの？」

「包帯がしつくりこないんだ。だから、診てもらいたいんだ」

すぐに答えて、右手を差し出した。包帯が巻かれ、まるでミイラになったような右手。

「他に違和感は？」

「かゆい」

「それは、稽古のし過ぎ。汗のせいっていうより」

イエは書類を腋に挟み直した。

「自分で包帯巻けるでしょ？」

「片手でうまく結べなくて」

リエンは、ぎこちない笑みを浮かべた。

イエはそれを見て、彼の目論みを悟った。

「外にいるわ」

「え？」

「フーに会いに来たんでしょ」

図星だ。「違っつて」あわてて訂正した。

「へえー」何か言いたげのイエ。「右手見るから」

イエの手で包帯が解かれる。何か所も縫われた、傷跡が赤く山を作り、盛り上がっていた。

「もう包帯外しなさい。治ってきてる。このままだと傷の回復が遅くなるよ」

「なんだ、もっとひどくなってると思った」リエンは胸を撫で下ろす。「すごく、かゆくなるから」

「だけど、このままだとここにくる理由がなくなる」イエは、神妙な面持ちを見せた。「これから、仮病を使ってここにきな」

「何を急に言ってるんですか！」リエンは、言葉に詰まった。だから「フーは、俺が見舞わなくても」と、本音をつい口にしてしまった。

「やっぱり、それが目的だったか」

鬼の首をとったかのように勝ち誇るイエ。陽動作戦だったようだ。リエンにクリティカルに決まる。彼の息の根が止まった。

「あの子、いつもあんたがくるの楽しみにしてんの。怪我が治っても見舞いに来なさい。っていつてもさ、すぐに退院できるけど」

「怪我は？」

「もう、ほとんど治ってる。ってか、私が言った症状なんて、でたらめだから。あーでも言わなきゃ、馬鹿二人に付ける薬はないからね。全然、大丈夫。竹刀も持てるはず」

「馬鹿二人？」

その言葉が気にはなったが、思ったほどひどくなかった怪我にリ

エンは、ほっとした。

「それより、油売ってないで早く会いに行きなさい」 イエは、書類ではたいて、リエンを急かした。

第十五話：三日後の後日談、その二

イエに急かされて外に出たけれど、フーが何処にいるか見当がつかなかった。とりあえず、リエンは道場の周りを歩くことにした。

西日が照らす中、人の影すら見当たらない。目を凝らして周りを見回すと、不意に竹刀を振る音が聞こえた。道場の中から。稽古も終わり、誰もいないはずなのに。

小窓から覗くと、壁に映る人型の影が見えた。師匠かと思ったが、彼らよりもずつと小柄だ。それでも、竹刀が空気を切り裂きながら鞭のようにしなる。

影が不意に動きを止め、脇腹を気にするように触る仕草を見て、誰だか分かった。リエンは、道場へと駆けだした。

.....

「怪我人がなに隠れてやってんだよ」

道場の中で、リエンは後ろ姿に声をかけた。一人、素振りしていたその背中が、ぴくり動いた。

「探したぞ」

「身体が動かなかったら困るから」振り返り、困ったように笑うフリ。「駄目かな？」

「怪我は？」

気をつけていても、自然と刺々しくなる口調。

「痛くなくなったけど、まだ変な感じ」

それでも、彼女は怖じけづかなかった。

「なら休めよ」

「嫌。寝てるのつまらないし、休みたくないもの」

「イエさんが知ったら怒るぞ」

「鍵、イエさんからもらったの」

「なら」

リエンは整頓された竹刀の山から自分が使う一本を抜き出した。

「俺が相手してやるよ」

「いいの？」

「この前の続き」

「私、今度は最初から本気出すよ？」

「病み上がりでの本気だろ？」

「泣いても知らないよ」

この三日間お互いに、軽口を叩くまでに信頼できるようになった。前よりも、そしてこれからも、まだまだ良くなるはずだ。

「この前は、悪かった」

医務室で謝った時とは違う。リエンは正面を見て、フーの目を見て謝った。

「もう大丈夫だよ。だから、気にしないで。でも……心配してくれて、ありがとう」

彼女は、柔らかく笑った。決して弱くなんかない。傷を隠しているだけの本当に、優しい女の子だ。

その時、ちょうど正面の扉が開いた。仲良く談笑する、二人より年上の少女少女達が現れる。

「リエン、まだやってるのか？ 俺達、荷物忘れたから戻ったんだけど、戸締まり……………」

その中の一人がそう言いかけて、言い淀む。怪我しているはずのフーの姿を見かけたから。彼女に冷たい視線を投げかける。彼らの視線が束になって彼女に襲い掛かる。

直にそれを感じたフーは、大型の獣から身を守る小動物のように、柔らかい表情を強張らせた。

「戸締まりなら、大丈夫ですよ。俺達、まだ稽古するつもりだし。なんなら、鍵も師匠に返してきましようか？」

道場内に広がる嫌な雰囲気搔き消すように、あっけらかんとした声で、リエンは年上達に返事をした。

そのまま、フーを見つめる。その眼差しに心配ないからなと気持ちを含めて。

「あ、ああ。よろしくな。鍵は、靴入れの左下に置いておくから」

出鼻をくじかれたように、少年は慌てて返事をした。忘れていた荷物を見つけると、そそくさと彼らは、道場をようとす。

そうする前に。

「フー。かかってこい！」

わざと大きな声を出して、リエンは挑発した。構えて、待つ態勢に入る。

フーは我に気付いたようにリエンの声が耳に届いた。彼女は、リエンと再度向きあう。

リエンと視線が合って、フーは目を少しだけ、大きく開いた。強張っていた顔が和らいで微笑んだ。

リエンはその顔を見て、微かに頷いた。そうだ、それでいいんだ。年上の彼らにフーを認めさせる方法は、ただ一つ。彼女の實力を

示せばいい。三日前みたいに、お互いが気を使わないで、正々堂々と試合をすればいい。そんな、あっさりと決着がつくような二人ではない。彼も、彼女もそんな事、前よりもよく知っている。

そんな二人の間合いに、帰ろうとしていた彼らは引きずりこまれ、見入ってしまった。

「ほら、早く」

いうやいなや、病み上がりとは思えないような速さでフーが駆ける。高速の打ち込みを放つ彼女をリエンは正面から堂々と、迎え撃つ。

道場内を揺り動かすような音をたてて、竹刀同士が激しくかちあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0921e/>

re-very

2010年10月16日00時23分発行